



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アプロディシアスのアレクサンドロス 『運命について』 日本語訳・注 (III・完)
Author(s)	近藤, 智彦
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 151, 1(左)-47(左)
Issue Date	2017-02-28
DOI	https://doi.org/10.14943/bgsl.151.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64721
Type	departmental bulletin paper
File Information	151_01_kondo.pdf



アプロディシアスのアレクサンドロス 『運命について』 日本語訳・注 (Ⅲ・完)

近 藤 智 彦

(承前)

【運命論に対する応答Ⅰ：宇宙の統一性】

XXII [191.26] 以上のこと〔運命論に対する批判〕を先に考察し終えたところで、今度は、運命について彼ら〔運命論者〕が論じていることそれ自体を比較対照した上で、次の点を検討してみるのも悪くはないだろう。すなわち、彼らは以上のように明白な事実ですら蔑ろにしているわけだが、彼らの説が真実に対する親近性ゆえにそうすることも理に適っていると言えるほどの力をもっているかどうか、という点である。ただし、この点についての議論は、われわれの目下の主題にとって役に立つ範囲に限ることにしよう。

[191.30] 彼ら〔運命論者〕の主張では¹、この宇宙は、一なるものでありな

【方針】

- ・ 本篇は、近藤智彦・杉山和希「アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』日本語訳・注 (Ⅰ)」『北海道大学文学研究科紀要』142 (2014)、左 1-左 32 [以下「日本語訳・注 (Ⅰ)」]、近藤智彦「アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』日本語訳・注 (Ⅱ)」『北海道大学文学研究科紀要』145 (2015)、左 1-左 32 [以下「日本語訳・注 (Ⅱ)」] の続篇である。
- ・ 方針の詳細については前篇「日本語訳・注 (Ⅰ)」を参照のこと。

【注】

¹ 以下、= *SVF* II.945 (部分)。

がらすべての諸存在を自らの内に²包摂しており、生命的で理性的で知性的な自然本性によって統御されているのだが、その諸存在に対する統御は永遠的で、ある繋がりと秩序に即して進行している³。すなわち、最初のものがその後に生じるものごとの原因となり、そのような仕方であらゆるものごとが互いに結びついているのである。そして、この宇宙の内で何が生じるとしても、それを原因として何か他のものごとが絶対的に続くことも結合することもないような仕方では生じることはないし、また逆に、後に生じるものごとが先に生じたものごとのいずれにも結びつけられたかのように続くことのないような仕方では切り離されることもありえない。生じるものごとにはすべて何か他のものごとが続いていて、先のものごとを原因として必然的につながっているのであり⁴、また、生じるものごとはすべて自らに先立つ何らかのものごとをもっていて、それを原因として結合しているのである。実際、宇宙の内には、先に生じたものごとのすべてから切り離され分離してしまっているようなものごとは何もないため、原因なくして存在したり生じたりするものごとは何一つないのである⁵。というのも、もし原因のない運動が導入

² 底本に従い αὐτῶν αὐτῶν (Gercke Bruns) と読む。

³ ストア派の学説によると、宇宙全体は神＝ロゴスないし氣息（プネウマ）によって統一されているとされることについては、アプロディシアスのアレクサンドロス『混合について』216.1-14=SVF II.470, 216.14-218.10=SVF II.473, 223.25-224.4=SVF II.441, 226.34-227.17=SVF II.475, クレオメデス『天体の回転運動について』1.1=SVF II.546, セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』9.78-85=SVF II.1013 他。宇宙が魂や知性を具えた生きものとされることについては、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』7.142-143=SVF II.633 他。運命が一種の「繋がり」や「秩序」として捉えられることについては、偽プルタルコス『学説誌』885B=SVF II.917, デイオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』7.149=SVF I.175, II.915, キケロ『ト占について』1.125-126=SVF II.921, ゲッリウス『アッティカの夜』7.2.1-3=SVF II.1000 他。

⁴ 底本に従い <ἐξ> αὐτοῦ (O) と読む。

⁵ 「原因のない運動はない」とストア派のクリュシッポスが論じたことについては、プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1045b-c=SVF II.973, キケロ『運命について』20-21=SVF II.952, キケロ『ト占について』2.61, ガレノス『ヒッポクラテスとプラトンの学説について』4.4.35-6。

されるならば、宇宙はバラバラに分割され、もはや一なる秩序と管理（οἰκονομία）に即して統御される一なるものとして永遠に⁶あり続けることはなくなるだろうからである。だが、もし存在したり生じたりするものごとのすべてが、それを必然的に結果させるような何らかの先行する原因をもつわけではないとすると、原因のない運動が導入されることになる。そして彼らの主張では、原因なくして何かが生じることは、無から何かが生じることと同様の事態であって、同様に不可能なのである⁷。かくして万有の統御は、無限の過去から無限の未来へと、活動的な仕方⁸で終わることなく続いている[—このように彼らは主張する]。

[192.17] 彼らは諸原因の間に区別があると考え、その区別を提示する中で、次のような諸原因の大群を挙げている⁹。すなわち、惹起的原因、共同的原因、維持的原因¹⁰、保持的原因、その他諸々である¹¹（というのも、彼らが論じているものをすべて並べて話を長引かせるべきではなく¹²、運命についての彼らの学説の趣旨を示すだけでよいだろうから）。このように数多くの原因があるものの、そのすべてにわたって次の点は同等の仕方⁸で真であると

⁶ 「永遠に」を「一なる秩序と管理に即して統御される」にかけけることも可能か（SVF）。

⁷ 「無から生じるものはない」というパルメニデス以来のテーゼは、アリストテレスも含めて古代哲学では一般に共有されている（パルメニデス断片 28B8, 5-21 DK, アリストテレス『自然学』191a30 他）。

⁸ 底本は写本通り ἐναργῶς「明白な仕方⁸で」と読んでいるが、ἐνεργῶς（Grotius Usener Gercke SVF Rodier）と読む。

⁹ 底本に従い ἦν ἐκτιθέντες σμῆνος [γὰρ] [del. von Arnim SVF] αἰτίων と読む。

¹⁰ 主要写本には ἀκτικά とあるが、底本に従い ἐκτικά（K Cas. Lond.）と読む。

¹¹ ここでの諸原因の種類のリストは、偽ガレノス『哲学者伝』19（Dox. 611.5-15）、アレクサンドレイアのクレメンス『雑録集』8.9.26.3-4, 33.1-9=SVF II. 346, 351 等に酷似。他に、キケロ『運命について』39-44=SVF II. 974, プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1055f-1056a, 1056b=SVF II. 994, 997, セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概説』3.15-16。ストア派に由来する諸原因の区別については、Frede 1980, 金山・金山 1998, 424 補注 c, Bobzien 1999 を参照。

¹² οὐδὲν γὰρ δεῖ から括弧に入れ（Lond. von Arnim）、底本に従い παρατιθέμενον, ἀλλ' αὐτόν（von Arnim SVF）と読む。

彼らは主張する。すなわち、原因と、その原因がそれにとって原因であるところのものごと〔結果〕とに関する状況がすべて同じであれば、時によって別々の仕方でも〔結果が〕起こることは不可能だ、という点である¹³。なぜなら、もしそのような仕方では生じるならば、原因のない運動が存在することになってしまうからである。

[192.25] 彼らの主張では、運命それ自体、すなわち、自然本性ないしそれに即して万有が統御されるロゴスこそが神であって、それは存在したり生じたりするものごとのすべての内にありながら、存在するすべてのものの固有の自然本性を万有の管理のために用いるのである¹⁴。運命について彼らが提示した学説は、要約して言えば以上のようなものである。

XXIII [193.2] 以上で論じられていることが誤っているということは、外からの議論や反駁を必要とはせず、そのこと自体からして明らかだろう。なぜなら、論じられている当の事柄に対して合致していないということ自体が、その議論に対するこの上なく明らかな反駁となるだろうからである。最初に論じられたこと、すなわち、存在するものごとのすべてがその後に生じるものごとの原因となり、そしてそのような仕方でも、最初のものにその次のもの

¹³ この箇所における因果的決定論の定式化は、エメサのネメシオス『人間の自然本性について』35章105.18-21 Morani=SVF II. 991に類似した箇所があることなどから、そこでクリュシッポスとともに名が挙がっているストア派のピロパトル（後2世紀初頭か）に由来するものと考えられる。この点については、「日本語訳・注（II）」注43、およびBobzien 1998, 370-375を参照。Long 1971, 188-189, Sorabji 1980, 64-67は、「状況がすべて同じ」という表現の背後に、ストア派のいわゆる永劫回帰の説がある可能性を示唆している。

¹⁴ ストア派が運命を宇宙に内在する神=ロゴスと同一視したことについては、ストバイオス『抜粋集』1.132.27-133.5=SVFI. 87, ラクタンティウス『神的教理』4.9/テルトゥリアヌス『弁明』21=SVFI. 160, ストバイオス『抜粋集』1.78.18-79.20=SVFI. 176, II. 913, ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』7.135=SVFI. 102, II. 580, プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1049F-1050A=SVF II. 937, アリストクレス断片3 Heiland/Chiesara=エウセビオス『福音の準備』15.14.2=SVF II. 528, ピロデモス『敬虔について』11=SVF II. 1076, キケロ『神々の本性について』1.39-41=SVF II. 1077 他。ここでの「固有の自然本性」については、13章181.15-182.20の議論を参照。

が鎖のように結びついていることにより、物事同士が互いにつながっていると彼らは論じ、それをあたかも運命の実体であるかのようにみなしているのだが¹⁵、この議論が事実と噛み合っていないということは明らかではないだろうか。子の原因が父であるというように、原因は同族性に即して求めなくてはならないのであれば——人間の原因は人間、馬の原因は馬というように——、そもそも結婚していない者は、その人の後に生じるいかなるものごとの原因になるというのか。歳若くして亡くなってしまった子は、いかなるものごとの原因になるというのか。実際、生じるものごとのうちの多くが、量的な不足のせいで動かされなかったり先に減びてしまったりするために¹⁶、それに備わっている能力に即したいかなるものごとの原因にもなるには至らないものなのである¹⁷。身体のある部分に生長する余分なものは¹⁸、いかなるものごとの原因だというのか。奇形や自然に反して生じたものごとは、そもそも存続することすらできないのであるが、それがいったいいかなるものごとの原因だというのか。植物の外殻は果皮のために、果皮は果実のためにあり、また、水〔雨〕が注がれるのは育つため、育つのは果実をつけるためであるとしても¹⁹、これ以外の仕方では生じるものごとも植物には数多く見出すことができる。例えば、腐った果実や干からびた果実は、その後に生じるいかなるものごとの原因になると言うのだろうか。葉の一部が二重であることは、いかなるものごとの原因になるというのか。以上のことから、真実を見ることを望み、そうする能力のある者にとっては、次のことは明らかだろう。すなわち、可能的なものごとがすべて²⁰活動する²¹わけではないのと同じよう

¹⁵ =SVF II. 945（部分）。

¹⁶ 「量的な不足のためか、動かされなかったためか、先に減びてしまったためか」とも解しうる。

¹⁷ 底本に従い τῶν は削除（del. B²O, om. lat.）。

¹⁸ イボのようなものが考えられているか（Sharplesの注釈に引かれたLloydの提案）。

¹⁹ =SVF II. 1159。ただし、アリストテレス『魂について』412b2f.、『自然学』198b10-23, 199a25f.。

²⁰ 底本に従い πάντα を πᾶν τὸ（Schwartz）と読む。

²¹ 底本に従い ἐνεργεῖ[v]（Rodier）と読む。Bruns は ἐνεργεῖν <ἐνεργεῖ>「活動することが可

に、原因になりうるものごとがすべて、今すでに原因であったり、かつて原因であったり、これから原因になるだろうというわけではないということである。生じたものごとがすべて、すでに存在しているというだけですぐに、これから存在するだろう何らかのものごとの原因にもなるわけではないのである。

[193.25] もし彼らが論敵に立ち向かうために、これらのものごと〈原因では〉あると言いながら²²、いかなるものごとの原因なのかは不明なのだといい逃れをするならば²³ (摂理についての学説に関しても、彼らは同じような言い逃れを強えられることが度々あるのだが)、それは問題を安易な仕方では回避しているに過ぎない²⁴。なぜなら、この論法を用いれば、いかなる不条理なものごとについても、それは存在しており、何らかの理に適った原因を有してはいるのだが、その原因がわれわれにはいまだ不明なのである、とすることができるからである。

XXIV [193.30] では、事実が以上のようなものであるならば、原因なしに生じるものごとがあることになり、そのことをわれわれの議論は支持することになるのだろうか。それとも、事実がわれわれの論じたような仕方であるとしても、いかなるものごとにも原因なしには生じないということは保たれるのだろうか²⁵。もしわれわれが諸原因の鎖を²⁶ 放棄して、すなわち、最初に生じるものごとには (原因であるということがその実体に含まれているかのように)

能なものごとがすべて活動するわけではない」と読んでいる。

²² 底本に従い <αἴτια> μὲν (von Arnim SVF Hackforth) と読む。

²³ 底本に従い εἶναι, τίνας (VHO Gercke von Arnim Hackforth) と読む。

²⁴ = SVF II. 947. ストア派による類似の主張として、ラクタンティウス『神の怒りについて』13.9-10 = SVF II. 1172, プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1045b-d = SVF II. 973. 偶運についての同様の説明については、8章174.1-3, および「日本語訳・注 (I)」注94参照。

²⁵ 以下では後者の選択肢がとられているが、偽(?) アプロディシアスのアレクサンドロス『マンティッサ』22, 169.33-172.15では、原因のない運動の存在を認める別の議論が展開されている。

²⁶ 諸写本には ἀναλύσεως「分析」とあるが、底本に従い ἀλύσεως (Schulthess O) と読む。

自然本性的に原因となるはずであるということが必然的に帰結すると論じることを放棄して、実際に生じるものごとから事後的に原因を割り当て、さらにはその生じるものごとの厳密な意味での原因を探求するならば、原因なしに生じることがあるということにもならず、だからと言って生じるものごとがすべて必然的に上述のような運命に即してあるということにもならないだろう。

[194.8] 例えば、ソフロニスコスは、ただ存在するというそれだけで必然的に、父であったり、彼の後に生じる何らかのものごとの原因であったりするわけではない。しかし、もしソクラテスが存在するならば、必然的にソフロニスコスがソクラテスの生成の原因となる²⁷。基礎があるからといって必然的に家が生じるわけではないが、家があるのであれば基礎が先に置かれていたことは必然である²⁸。自然本性的に生じるものごとにはちょうどそのような仕方必然的に原因があるとみなさなければならないが、最初に生じるものごとには何かの原因であるということが必然的に帰結するわけではなく、むしろ後に生じるものごとにこそ、その前の何らかのものごとを必然的に原因とするということが帰結するのである²⁹。

[194.15] 生じるものごとの中には、何らかの原因を有してはいるが、固有で主導的な原因ではなく、われわれが「付带的」と呼ぶ慣わしとなっている原因しか有していないものごともある。何かを植えるために掘っていた者によって発見された宝は、掘ることという原因をもつが、それは固有の原因でもそのこと自体のゆえに生じた原因でもない。というのも、厳密な意味での原因とは、その結果が——彼らが考えるように——必然的に帰結するものだ

²⁷ 写本通りに読むと「もし必然的にソクラテスが存在するならば、必然的にソフロニスコスがソクラテスの生成の原因となる」となるが、底本に従い *εἰ μέντοι Σωκράτης εἴη, ἐξ ἀνάγκης αὐτῷ τῆς γενέσεως Σωφρονίσκος [ἐξ ἀνάγκης] αἴτιος* (Donini) と読む。

²⁸ 底本に従い *τὸν θεμέλιον ἀνάγκη, οὕτως ἔχειν* (Va¹² Lond. Orelli Rodier) と区切って読む。

²⁹ 以上の具体例は、アリストテレス『分析論後書』95a27-36, 『生成と消滅について』337b14-32, 338b9-11, 『弁論術』1392a19-22, 1393a6-8。また、ここで念頭におかれているアリストテレスの「条件的必然性」の考え方については、『自然学』199b34-200a8, 『動物の諸部分について』639b24ff., 642a5ff. 他。

けを言うか、あるいはたいていの場合に帰結するものも含めるかのいずれかだからである³⁰。これに対して、上述の付帯的な原因の場合は、そうした結果の原因になることは稀なのである。

[194.22] したがって、以上のような議論から、以下の両者が同時に帰結する。すなわち一方では、原因なしに生じるものごとは何もないと論じつつ、他方では、偶運的および偶発的に生じるものごとがあるということや、われわれ次第のものごとや許容的なものごとにもまた言葉の上ではなく事実の上で存在するということを保つことになるのである。

XXV [194.25] というのも、何かに後続するものごとはすべてその[先行する]ものごとをみずからの存在の原因とし、何かに先行するものはすべてその[後続する]ものごとの原因になる、という主張が誤りである³¹ことは明らかではなからうか³²。実際われわれが目にするように、時間的に互いに連続しているものごとであっても、すべてのものごとがその前に先行して生じたものごとを原因として生じるわけではないからである。例えば、歩くことは立ち上がることを原因とするわけでもなければ、夜は昼を原因とするわけでもないし、イストミア競技祭はオリュンピア競技祭を原因とするわけ

³⁰ 底本は ἐξ ἀνάγκης μόνον ὡς τούτοις δοκεῖ καὶ ὡς ἐπὶ τὸ πολὺ ἐπόμενον ἔχει τὸ αἴτιον ἐξ ἀνάγκης <ἐπό>μενον ὡς τούτοις δοκεῖ <ῆ> καὶ ὡς ἐπὶ τὸ πολὺ [ἐπόμενον] ἔχει τὸ αἴτι<ατ>όν (Hackforth) 「その結果が——彼らが考えるように——必然的に帰結するものごとか、あるいはたいていの場合に帰結するものも含めるかのいずれかだからである」と読んでいるが、ここでは写本の読みをより多く残した ἐξ ἀνάγκης μόνον ὡς τούτοις δοκεῖ <ῆ> καὶ ὡς ἐπὶ τὸ πολὺ ἐπόμενον ἔχει τὸ αἴτι<ατ>όν (Zierl) という読みを採用する。

³¹ 底本に従い τὸ λέγειν ψεῦδος ἐπὶ τὸ λέγειν (HB²O SVF) と読む。

³² =SVF II.948 (部分)。ストア派の運命論に対する同様の批判が、キケロ『運命について』34-36にも見られる。ただしストア派の因果論によると(セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』9.211=SVF II.341 他), 原因は物体(例えば医者を用いる「メス」)であるのに対して結果は非物体(例えば肉が「切られること」)であるとされるため、あるものごとが別のものごとの原因となり、そのものごとがまた別のものごとの原因となる、という単純な意味での「因果連鎖」として運命が捉えられていたわけではないと考えられる(Hankinson 1996, Meyer 2009)。

もなければ³³，夏は冬を原因とするわけでもない。したがって彼らが，最初に生じたものごとを常にその後のものごとの原因とみなし，諸原因の何らかの繋がりや連続を作り上げるような，そうした仕方原因を帰属させたうえで，そのことをもって原因なしに生じるものごとは何もないということの説明（原因）としていることには³⁴，訝しく思わずにはいられないだろう³⁵。

[195.5] われわれは多くの場合，最初に生じるものごととその後に生じるものごとの原因が同じであることを目にする。例えば，立ち上がることと歩くことの原因は同じである。すなわち，立ち上がるのが歩くことの原因なのではなく，立ち上がった人散歩したりするその人，ないし，その人の選択（προαίρεσις）が，その両方のことの原因なのである。また，夜と昼が秩序にしたがって交替するのをわれわれは目にするが，それらの原因はどちらも同一なのであり，同じことは季節の移り変わりにもあてはまる。すなわち，冬が夏の原因なのではなく，前者〔夜と昼〕の原因も後者〔冬と夏〕の原因も³⁶，神的な物体〔天体〕の運動³⁷と周回や黄道の傾きなのであり，さらにはその傾きに沿って動く太陽が，前述のものすべてにとって同じように原因なのである³⁸。

[195.13] また³⁹，夜は⁴⁰ 昼の原因ではなく，冬は夏の原因ではなく，それらは鎖のように互いに絡み合っているが，だからといって⁴¹ それらが原因

³³ アリストテレス『形而上学』994a22, 1023b5-11。

³⁴ 底本に従い φέρονται を φέροντας (Hackforth) と読む。

³⁵ =SVF II.948 (部分)。

³⁶ 底本に従い ἐκείνων τε καὶ τούτων [lat.; τούτω V¹, τούτου v.c.V a¹²] と読む。

³⁷ 底本に従い ἡ を挿入 (B²)。

³⁸ アリストテレス『形而上学』Λ. 6。ただしストア派も同様に，宇宙全体の統御に対して天や太陽が主導的な役割を果たすと考えていた（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』7.138-139=SVF II.634, 644, 同7.151-152=SVF II.693 他）。

³⁹ 以下，=SVF II.948 (部分)。

⁴⁰ 底本に従い ἡ を挿入 (Bruns)。

⁴¹ 底本に従い καὶ <οὐ μὴν> ὅτι μὴ (SVF) と読む。

なしに生じるというわけではない⁴²，そのように生じていないからといって，宇宙とその内に生じたり存在したりするものごとの統一性が失われてバラバラになってしまうというわけでもない。宇宙の内に生じるものごとの連続性を保つためには，神的なもの〔天体〕とそれらの周囲があれば十分だからである。また，立ち上がることを原因としないからといって，歩くことが原因のないものになるわけでもない。

[195.19] したがって，彼らが主張する諸原因の繋がりなるものは⁴³，原因なしに生じるものごとは何もないことについて，理に適った説明を与えるものとはなっていないのである。運動や時間に何らかの原因があるのと同じように（ただし，運動の原因はその前の運動ではなく，時間の原因はその前の時間ではないのだが⁴⁴），その運動や時間の内でそれらを通して生じる事物にも原因がある。たしかに，生じるものごとの間の連続性には何らかの原因があり，その原因のために宇宙は常に同一同様の仕方で統御される一なる永遠のものなのであって，その原因をなおざりにすることなく⁴⁵探求すべきではある。ただしその原因を，動物の生成の場合に目にすることができるとは，古いものから新しいものが生じるような類の原因として考えるべきではないのである。

[195.28] 他方，原因の中には，もはやそれに先立つ他の始源（ἀρχή）や原因を有しないような始源も存在する，と論じることは理に適っている⁴⁶。実

⁴² 底本に従い ἀν ἕως を ἀνατίως (Bruns coni. in app, SVF) と読む。

⁴³ 底本に従い οὐχ οὕτως を οὐχ ὁ τῶν (B², Bruns coni. in app., SVF) と読む。

⁴⁴ Zago 2012a は τὸ πρὸ αὐτοῦ [χρόνον] [*illud quod ante ipsum* lat.] とする削除を提案している（意味には影響しない）。

⁴⁵ 底本に従い μὴ を挿入 (B²)。

⁴⁶ アリストテレス『形而上学』994a16-19, 994b20。念頭に置かれているのは，第一の「不動の動者」のことか（アリストテレス『自然学』8.5-6, 『形而上学』Λ. 6）。ただしストア派も神＝ロゴスを，アリストテレスとは異なる意味で一種の「第一原因」として考えていた（セネカ『倫理書簡集』65.11=SVF II. 346a, 『恩恵について』4.7.2=SVF II. 1024, 『自然研究』2.45.2, マルクス・アウレリウス『自省録』9.39, アウグスティヌス『神の国』5.8.33-5）。

際、生じるものごとがすべて原因を有しているとしても、だからといってあらゆるものごとに原因があることにもなるのが必然だというわけではない。存在するものがすべて「生じる」のではないからである。諸原因とその繋がりが連続が無限に続いていて、第一（最初）のものも最後のものもないと論じることなど、どうして不条理でないことがあろうか⁴⁷。実際、第一（最初）の原因が存在しないと論じことは、原因を消去するのと同じことなのである。始源が消去されれば、その始源の後にくるものごととも消去されることになるのは必然だからである。また、この議論にしたがうならば、知識も消去されることになるだろう。知識とは厳密な意味では第一（最初）の諸原因の認識のことであるが、彼らにしたがうと、諸原因の内に第一（最初）のものは存在しないことになるからである⁴⁸。

[196.7] また⁴⁹、秩序からの逸脱のすべてが、その中で逸脱が生じる当のものごとを消去するわけではない。一部のものごとが王の秩序に反して生じることも不可能ではないが、それが王制を絶対的に破滅させるわけではないし、それと同じような事態が宇宙の中で生じても、だからといって宇宙のよい状態（εὐδαιμονία）を絶対的に台無しにするわけでもないからである。それはちょうど、召使がたまたま怠惰であったからといって、家や主人のよい状態を台無しにするわけではないのと同じことである⁵⁰。

⁴⁷ 以下、=SVF II.949。

⁴⁸ アリストテレス『自然学』184a12-14, 194b18-20, 『形而上学』1003a26-32。

⁴⁹ 底本に従い τε を δε (Thillet, Donini) と読む。

⁵⁰ アリストテレス『形而上学』1075a11-25。ただし、同様の類比をストア派のクリュシッポスも用いている（プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1051b-d=SVF II.1178, キケロ『神々の本性について』2.167）。なお、アプロディシアスのアレクサンドロスの摂理論として、アラビア語訳のみ残存する『摂理について（*De providentia*）』がある。

【運命論に対する応答Ⅱ：性向と行為】

XXVI [196.13] われわれ次第のものごとは人々に共通の先取観念がそうみなしているようなものであるのか、という点について問題にすること自体は不合理ではない⁵¹。しかし、問題としていることにあたかもそれが同意されているかのように引きずられて、これほどまでに明白なことを消去する一方で、人々の生を影絵や冗談のようなものにして、自分自身で問題にしていることに躍起になることは、まったくもって不合理ではなからうか。運動に関するゼノンの議論のいずれかを解くことができないとしても、だからといって運動を否定しなければならないということにはならない。事実のもつ明白さの方が⁵²、それを否定しようとするあらゆる説得的な議論よりも、同意するのに十分な理由となるからである。

[196.21] とはいえおそらくは、彼らが問題にしていることの中でも最も自信をもっている点をわれわれもまた取り上げて、それがどのようなものなのかを吟味してみるのも悪くはないだろう⁵³。それがそれほど解決の難しいもの⁵⁴ではないということが、おそらくは明らかになるだろうからである。さて、彼らが問題にしている点のなかに、次のようなものがある。彼らは言う⁵⁵。「もし、われわれ次第のものごととはわれわれが相対立することもできるものごとのことであるのならば、そして、そのようなものごとにこそ称賛

⁵¹ 以下、=SVF II.984（部分）。

⁵² 底本に従い ἐνέργεια を ἐνάργεια (Lond. O) と読む。

⁵³ 以下、=SVF II.984（部分）。

⁵⁴ 底本に従い εἰς αὐτά を δόσλντα (Bruns, fort., in app.) と読む。

⁵⁵ 以下の議論は、アリストテレス『ニコマコス倫理学』1113b3-1114b25に類似している。ストア派が同様の議論をしたか否かは不明であるが、ストア派によると悪徳の人も徳を獲得しうるとされていたこと（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』7.91=SVF III.223）、徳が失われえないものか否かをめぐってはストア派内部で論争があったことが伝えられている（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』7.127-8=SVF III.237）。

や非難，勸奨や抑止，懲罰や褒賞が帰されるのならば，思慮あることも徳を有することも〔そうした徳を〕有する人次第なのではないことになってしまうだろう。というのも，彼ら〔思慮ある有徳な人〕はもはや，徳に対立する悪徳を受け入れることのできない者だからである。同じように，悪徳もまた悪徳の人次第ではないことになるだろう。もはや悪徳の人ではないことが彼ら次第ではないからである。しかしながら，徳や悪徳はわれわれ次第ではなく，それらに称賛や非難が生じることはない，と論じるのは不条理である。したがって，われわれ次第のものごとはそのようなものではないことになる。」

XXVII [197.3] 徳と悪徳は失われえないということを彼らに譲歩したとしても⁵⁶，われわれはおそらくその問題をより容易なものとして捉えた上で，性向というものは，それを獲得する前には獲得しないことも彼ら次第であった限りで，その性向を有する人次第なのである，と論じうるだろう。というのも，徳を有する人は，善いものごとをおろそかにはせず⁵⁷ 選ぶことによって，自分自身にとって徳を獲得したことの原因となったのであり，悪徳を有する人の場合も同様だからである。技術についても同じ議論が成り立つ。すなわち，それぞれの技術者は，技術を有する前にはそうならないこともできる力能（ἐξουσία）を有していたのであるが，ひとたび技術者になってしまえば，そのような者にならなかったこともそのような者でないことも，もはや左右できなくなるのである。実際そのようなものごとが生じること（そのような者になること）はわれわれ次第なのであり，それゆえ，未来のものごとの場合と，現在や過去のものごとの場合とでは，真理は同じではないのである。なぜなら，現在や過去のものごとは，そうでないことやそうならなかったことはありえないが，未来のものごとは，そうならないことも許容される（ἐνδέχεται）からである。それゆえ，これこれの人が徳を獲得する前は，そのように〔有徳に〕ならないことも許容されるということが真であったのだが，

⁵⁶ 底本に従い *oi* (V) ではなく *οἱς* (EO) と読む。

⁵⁷ 底本に従い *kai* を *ἀντι* (Donini) と読む。

そのように「有徳に」なる者については、実際にそのように「有徳に」なったときには、そのように「有徳に」なったと語ることが真なのである⁵⁸。

[197.17] もし、思慮ある人は生まれたときからそのように思慮ある人であり、自然本性によって与えられた他のものに加えてこの思慮も自然本性から授かっているのだとしたら、そのように思慮ある人であることは、二足であることや理性的であることと同じように、まったくその人次第ではないことになるだろう。そして、そのように思慮ある人であることについて称賛されることはなく、むしろ神的な自然本性からそれほどの贈物を授かったのだという理由で驚嘆されることになるだろう⁵⁹。健康な人の場合も、自然本性の上では（生まれつき）虚弱ではあるが、自分自身の気遣いによってそのように健康になっている人については、自分自身のことを適切に配慮しており、その配慮のおかげで病気になっていないのだとみなして、われわれは称賛する。他方、自然本性から（生まれつき）健康であって、努力も気配りもせずに病気にならない人については⁶⁰、もはや称賛することはなく、他の人々にとっては苦勞を伴って具わるとしても歓迎されるものを苦勞もせずに得ている、ということを祝福するだけだろう。ちょうどそれと同じように——いやそれにもまして⁶¹——徳についても、もし徳というものが自然本性から（生まれつき）誰かに備わるものであるとしたら、われわれはそのようにするだろう。実際われわれは、神々についてはまさにそうしているのであるが。しかし、それはわれわれには不可能であり、自然本性から不可能なものごとを求めるべきではないのだから（というのも、自然本性こそ可能なものごとと不可能なものごとを定める尺度だからである。実際、徳とは各々のものの固有の自然本性⁶²の完全性（完成）であり頂点であるが⁶³、不完全なものが完全

⁵⁸ Zago 2012b に従い、 $\delta < \zeta > \delta \epsilon \tau\omicron\iota\omicron\upsilon\tau\omicron\varsigma$ [$\tau\omicron\iota\omicron\upsilon\tau\omicron\nu$ codd.] γίνεται, $\tau\omicron\upsilon\tau\omicron < \nu >$ και γενόμενον ἀληθὲς οὕτως λέγειν γεγονέναι と読む。

⁵⁹ 以下 32 章 204.12-21 を参照。

⁶⁰ 底本に従い $\kappa\alpha\iota \tau\omicron\upsilon\varsigma \nu\omicron\sigma\omicron\upsilon\eta\tau\alpha\varsigma$ を $\kappa\alpha\iota \omicron\upsilon \nu\omicron\sigma\omicron\upsilon\eta\tau\alpha\varsigma$ (cum Rodier) と読む。

⁶¹ 底本に従い $\epsilon\iota \tau\omicron \eta$ (Casp. O) と読む。

⁶² ここでは徳が「固有の自然本性」の完全性（完成）として捉えられているが、6 章で論

な状態にあることは不可能であり、生じるものごとは生じた直後は不完全なのである⁶⁴）、人間が徳を自然本性的にもった状態で⁶⁵生まれることはありえないのである。

[198.3] 自然本性は人間が徳を獲得することに対して何も寄与しないわけではなく、自然本性から人間は徳を受容できる能力と適応性を授かるのであり、これは他のいかなる動物も有することのないものなのである。この能力ゆえに人間は、身体的な優越性の点では多くの動物に劣っているものの、自然本性において他の動物よりもまさっているのである。もし、歩くことや歯や鬚が生えることなど自然本性に即してわれわれに後から生じることに、徳を受容する能力についても、成長し完全になるにつれてそれも授かることになるという仕方で、自然本性からわれわれが授かるのだとすれば、やはり徳は、前述のものと同じように、われわれ次第ではないことになるだろう。しかし、われわれはそのような仕方で徳を獲得するわけではない。実際、もし他のものと同じように思慮や徳もまた人間にとって生得的であるとしたら、われわれの全員、あるいは少なくとも大多数が、人間の自然本性に即した他のものごとを得るのと同様の仕方で⁶⁶、徳を受容する能力のみならず徳そのものもまた自然本性から授かることになるはずだろう。そして、称賛や非難など徳や悪徳について与えられる類のものはいずれも必要ではなくなるだろう⁶⁷。そうした徳が具わるのは、もっと神的な説明と実在⁶⁸によることになるだろうからである。だが、実際はそうではないのである。われわれが

じられていた「固有の自然本性」は、むしろ有徳になるために乗り越えられるべきものと考えられていた。この矛盾とも考えられる点については、Donini 1996 (2011) を参照。

⁶³ 底本に従い ἡ は削除 (Schwartz)。

⁶⁴ あるいは「生じるものごとは生じるという点 [生成のうちにあるという点] で直ちに不完全なのである」とも読める。

⁶⁵ 底本に従い ἐχοντα を挿入 (B²)。

⁶⁶ 底本に従い τῶν ἄλλων <τῶν> κατὰ (Apelt, Hackforth) と読むが⁸、αὐτοῖς τυγχάνουσιν を αὐτοῖς τυγχανόντων (Hackforth) とする底本の読みには従わない。

⁶⁷ 底本に従い δε を削除 (Bruns, exhib. lat.)。

⁶⁸ 一応 οὐσία を「実在」と訳したが、Gercke は αἰτίαν 「原因」とする修正を提案している。

目にするところでは、すべての人や大多数の人が徳を有しているわけではなく——これが自然本性に即して生じるものごとの徴であるが——、徳を有する人を一人見出すだけでも満足するのである⁶⁹。そうした人は、自然本性上われわれに必要ではあるが⁷⁰ 欠けているものを自分自身によって付け加えることで、訓練と教授を通して他の動物に対する人間の自然本性的な優越性を示してくれるからである。したがって、徳の獲得はわれわれ次第なのであり、称賛も非難も、よりよいことへの勧奨も、法に即したよりよい習慣を通しての訓練も、無益であつたり無駄であつたりするわけではないのである。

[198.26] 自然本性的に具わるものごとは、何らかの習慣によって他のあり方になることはありえないが（重さをもつものを何度も上に放り投げることで、その自然本性に即して⁷¹ 上方に移動するように習慣づけることはできない）、人間の性格は相異なる習慣を通して様々に異なるものとなる⁷²。自然本性的なものごとの場合には、われわれはまず一定の性向を獲得してからその性向に即して活動するが（何度も見ることによって視覚の性向を獲得するわけではなく、その性向をもっていることによって見るのである）、自然本性的ではないものごとの場合には、われわれは活動から一定の性向を獲得するのである。実際、職人は師の指導に従って職人の活動を何度も行うことでしか、職人にはなれないだろう。徳もまたわれわれはそうように獲得するのだから（節制ある活動を行うことで節制ある人となる）、自然本性的にわれわれに具わっているわけではないということになるだろう。

XXVIII [199.7] また⁷³、われわれは必然的に何らかの性格の人であつたりそうとなつたりするのだと主張し、われわれにそれを通して何らかの性格の人

⁶⁹ アリストテレス『ニコマコス倫理学』1179b7ff. 同様のストア派の考え方については、以下 28 章を参照。

⁷⁰ 写本のまま ἀναγκαῖον と読む。底本は ἀναγκαιός (Cyr., ?lat.) と修正し、「必然的に欠けているもの」と解している。

⁷¹ あるいは κατὰ τοῦ παρὰ と修正し「その自然本性に反して」と読むべきか (Grotius y Nourison Gercke (adnot.))。

⁷² アリストテレス『ニコマコス倫理学』1103a14-b2 他。

⁷³ 以下、=SVF III. 658。

になるような行為をすることもしないこともできる能力があることを認めず、それゆえ、悪しき人になる人はそれを通してそのように悪しき人になるような行為をしないことはできないのであり、それと同じことが善き人の場合にもあてはまる〔と主張するならば⁷⁴、どうだろうか。このように主張する〕人々は、人間があらゆる動物の中で最悪のものとして自然本性によって生み出されたのだと認めないわけにはいかないのではなからうか⁷⁵。しかし、その人間のためにこそ、彼らが言うところでは、他のあらゆるものごとが人間の保全に寄与するものとして生じているのである⁷⁶。しかも彼らの学説によると、ただ徳と悪徳のみが、前者は善きもの、後者は悪しきものであって⁷⁷、他の動物はそのどちらも受け入れることができないが、人間の大多数は悪しき者であるとされ、それどころか彼らが物語るところによれば、善き人となったのは一人か二人であって——ちょうど、アイティオピアのポイニクス（フェニックス）よりも希少な、常識外れ（*παράδοξον*）の自然本性に反した動物であるかのように——、[他の]人々はすべて⁷⁸悪しき者である。それどころか、相互にいかなる違いもないような仕方でも等しく悪しき人であって、賢者でない限り人は皆同じように狂っているとされるのである⁷⁹。もし

⁷⁴ Zago 2012b は、*τοῖς ἀγαθοῖς γινομένοις ὑπολαμβάνοντε* > 「善き〈者になる〉人の場合にもあてはまると〈みなす〉ならば」とする改変を提案しているが、その必要はないと思われる。

⁷⁵ 以下、ストア派の摂理論を念頭に置いた上での批判が展開されている。

⁷⁶ SVF II. 1152-1167。

⁷⁷ SVF III. 29-37。

⁷⁸ Lucarini 2007, 131 (*ap.* Zago 2012a, 386) は *οἱ δὲ <λοιποὶ> πάντες* 「(残りの) 人々はすべて」とする挿入を提案しているが、そうしなくとも意味的に補って読むことは可能だと思われる。Zago 2012a は、*οἱ πλείστοι* と *οἱ (δὲ) πάντες* を交換して、「すべての人々は悪しき者であるとされ、あるいは彼らが物語るところによれば……大多数の人々は悪しき者である」と読むことを提案している (cf. Gal. *Quod animi mores* 11, p. 76.7-16 Müller)。

⁷⁹ セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』7.432-435=SVF III. 657, プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1048e-1049a=SVF III. 662, 668, 『共通観念について』1063a, 『いかにして自分の徳に気づきうるかについて』75c-e=SVF III. 539, 539b,

そうであるなら、人間というものは、悪徳と狂気を生まれつきのものとして割り当てられているのだから、あらゆる動物の中で最も惨めな動物とならざるをえないのではなからうか。しかし今は、真実からかけ離れた彼らの学説が抱えている常識外れの議論（*παραδοξολογία*）を吟味することは大部分割愛して、われわれが脱線しはじめた地点に戻らなければならない。

XXIX [199.24] 以上、思慮ある人であることは次のような意味でその思慮ある人自身次第であるということを、われわれは示した。すなわち、思慮ある人はそのような人にならないこともできたという力能を以前には有していたのだから、思慮ある性向とその性向の獲得の原因はその人自身だと言える、という意味においてである。たしかに⁸⁰、思慮ある人はその性向をもはやその人次第のものとして有してはいない⁸¹（高い所からみずから身を投げた者は、身を投げることも投げないこともできる力能をもってはいたが、止まることはその人次第ではないように⁸²）。しかし、その性向をもちながら行う様々な活動のうちの何らかのことをなさないこともまた、その人次第なのである⁸³。すなわち、思慮ある人については、理性と思慮に即した活動⁸⁴を行

キケロ『神々の本性について』3.79、セネカ『倫理書簡集』42.1 他。

⁸⁰ 以下、=SVF III. 242（ただしストア派の資料ではないと考えられる）。

⁸¹ 底本に従い *τὴν μὲν οὖν ἔξιν μηκέτ' ἔχει* (Bruns; *ἔχειν libri*) ὡς ἐπ' αὐτῷ と読む。Zierl は *τὴν μὲν οὖν ἔξιν μηκέτ' ἔχειν οὐκ ἐπ' αὐτῷ* 「その性向をもはや有しないということはその人次第ではない」とする読みを提案している。

⁸² アリストテレス『ニコマコス倫理学』1114a17-18（ただし身投げではなく石を落とすというより穏やかな例）。同様の類比として、キケロ『トゥスクルム荘対談集』4.41、セネカ『怒りについて』1.7.4。

⁸³ 以下、(1) 性向による行為の決定は、個々の行為の詳細を限定するまでには及ばず、ある程度の選択の幅を許容するという議論（キケロ『運命について』7-9にも類似の議論）と、(2) 有徳の者も予言を破って取えて異なる行為をすることができる、という二つの議論が展開されるが、いずれもアリストテレスに類例は見出されないものであり、一回一回の行為の時点での選択可能性を確保するために取えて加えられた議論と考えられる（Donini 1987 (2011) 145-152、近藤 2008、8-9）。行為にはある程度の幅が許容されるという点については、アリストテレス『ニコマコス倫理学』1109b18-23。

⁸⁴ 底本に従い <τὰς> を挿入（add. B²）。

うことが最大限理に適っているとしても、[なお以下のことが成り立つ。すなわち] 第一に、その種の活動のうち何か特定のこれこれを行うということや、特定のこれこれのところまで行うというような点が決定されているわけではなく、そのような仕方で生じるあらゆるものごとにはある程度の幅が許されており、そうした点で少し逸脱したとしても行為の目標（προκειμένον）が否定されるわけではないのである。第二に、思慮ある人は自分が選んだ行為を必然的な仕方（κατηναγκασμένως）行うわけではなく、その行為を行わないことも自分が左右できるものとして行為するのである。なぜなら、思慮ある人は時に、活動の自由を示すために、自分によって理に適って生じるはずのことは行わない方がかえって理に適っていると考えたからである——例えば、ある予言者がその人に、その人はこれこれの行為を必然的に行うだろう、と予言した場合のように。予言者と自称している者たちもこのことを恐れて、すぐに反駁されてしまうことを避けるために、反駁できる人に対しては決してそのようなことを予言しないのである。彼らは、自分が予言することが起こるであろう時間を限定することを、反駁されやすくなるという理由で避けるものであるが、それとちょうど同じように、予言と相対立することを直ちに行うことができる人に対しては、何かを言ったり予言したりすることを避けるのである。

【運命論に対する応答Ⅲ：予知・ト占・神々】

XXX [200.12] 神々が未来のものごとを予知するのは理に適っている（神々が知らない未来のものごとがあると論じるのは不条理だから）と論じ、それを前提にした上で、あらゆるものごとが必然的に運命に即して生じるということを確認させようと試みるのは、真でもなければ理に適ってもいない⁸⁵。たしかに、当の事物の自然本性がこうした予知を認める場合には、将

⁸⁵ = SVF II. 940。前章の最後で言及された予言の話題から、以下の 30-31 章では、神々の予知とト占に関する脱線が続く。ストア派が神々の予知の範囲をどのように考えてい

来のものごとを知るものとして神よりも理に適った存在はいないだろう。しかし、そのような予言や予知を受け入れることが[その事物の自然本性に]不可能である場合には、神であっても不可能なものごとを知ることは⁸⁶もはや理に適っていない。実際、それ自身の自然本性において不可能なものごとは、神々のもとであってもその同じ自然本性を保つのである。例えば、対角線を辺と共測可能(σύμμετρον)にすること⁸⁷、二の二倍を五にすること、過去に生じたものごとを生じなかったことにすることは、神にとっても不可能なのである。神々はそもそも、このように不可能なものごとについては、望むこともないであろう⁸⁸。というのも、そのような不可能なものごとにとっては、それを語ることそれ自体の内に困難があるからである。それと同じように、それ固有の自然本性の上で生じることもしないことも可能であるものごとについて、それが絶対的に生じるだろうとか、絶対的に生じないだろうとかと予知することは、神々にとっても不可能である。もし、そのものごとについて生じる前に予知することが、そのものごとが(本来)もっている許容性を消去することになってしまうのならば、その許容性が保たれなければならない限り、そのものごとについて予知することは明らかに不可能になるだろう。

たかは定かではなく、したがって以下のアレクサンドロスの批判が適切かどうかとも明らかではない。カルキディウス『プラトン「ティマイオス」註解』160-161=SVF II. 943によると、ストア派は神が人間の思考や意志も含めたあらゆるものごとを予知していると主張したとされる(キケロ『ト占について』1.127=SVF II. 944も参照)。これに対して、ピロデモス『神々の幸福な生について』col. VII, 28 ff.=SVF II. 1183によると、神々もあらゆるものごとを知るわけではないとクリュシッポスが論じたとされるが、パピルスの読みが確かではなく解釈も定まっていない。ここでのアレクサンドロスの議論と類似したストア派への批判が、キケロ『ト占について』2.18, キケロ『運命について』32-33にも見られる(近藤 2007 を参照)。なお、神の予知がその対象となるものごとに必然性をもたらすかという問題は、その後の古代・中世の哲学において議論的となり続けることになる。

⁸⁶ 底本に従い τὸ を削除(Bruns)。

⁸⁷ アリストテレス『形而上学』1019b24, 1047b6-7。

⁸⁸ 底本に従い οὕτως. <αὐτοῖς> (Hackforth) と読む。

[200.28] 彼ら〔運命論者〕に従っても事態は同じであることは、彼らが、神々が将来のものごとを予知するということを前提にした上で、将来のものごとが必然的に生じるということを確立していることから明らかである。つまり彼らは、将来のものごとが必然的に生じないのであれば、予知はできないだろうと考えているのである。しかし、彼らに従っても神々の予知と予言から必然性が帰結するとされるのであれば⁸⁹、生じるものごとの内に必然性が存しない限り、彼らに従っても神々は将来のものごとを予知できないことになるだろう⁹⁰。したがって彼ら自身も、同じ無力を神々に帰したままなのである——ただし、不可能なことはできないということが、無力や弱さによって生じると言うべきだとしたらの話であるが。結局のところ彼らは、神的な存在に予言を通してより大きな能力を帰しているのではなく、むしろこのこと〔神々が予言能力をもっていること〕を前提とすることによって⁹¹、それに対応するような事物の自然本性を導入しているのであるが、そうすることで実際に生じている明白な事実とは決して合致もしなければ調和もしないことを論じているのである。

[201.7] というのも、この議論を応用すれば、どんな不可能なものごとについても、神々がそれを知らないはずはないことが理に適っているとの理由で、それは可能なのだと示すことができってしまうだろう⁹²。例えば、無限がどれほどの尺度のものかを神々が知らないのは不条理だということを前提とすることで⁹³、無限がどれほどの尺度のものかを知ることが可能であると考えられるだろう。もしそうであれば、無限が限定された尺度のものであることが可能である、と考えることもできってしまうだろう。さもないければ、神々ですらそれがどれほどの尺度のものかを知りえないことになるだろうからである。

⁸⁹ 底本に従い *ἐπεται* の後にコンマは打たない。

⁹⁰ 底本に従い *οὐ γὰρ* を *οὐδ' ἄν* (Donini) と読む。

⁹¹ 底本に従い *προλαμβάνειν* のまま読む (*προσλαμβάνειν* Bruns)。

⁹² 底本に従い *δυνατά* (add. O) を挿入。

⁹³ 底本に従い *θέμενος μέτρων* を *μέτρων, θέμενος* (Casp. O) と読む。

[201.13] 将来のものごとを予知するということはそのあるがままのあり方を知ることなのだから⁹⁴（予知することは創造することとは異なるため）、許容的なものごとを予知する者は⁹⁵それを許容的なものごととして予知するだろうということは明らかである⁹⁶。許容的なものごとについて、それが必然的にそうなるだろうものごととしてあるだろうと語ることは、予知ではないからである。したがって、神々であっても許容的なものごとは許容的なものごととして予知するだろうし、したがってそのような予知のゆえに必然性が絶対的に帰結することはないだろう。実際そのような仕方では、われわれも予知する者に耳を傾けるのである。というのは、何か行すべきものごとを選択したり行為したりすることを勧めつつ予言する者は、自分が予言している事柄について、必然的にそうなるだろうものごととして語ることはしないからである⁹⁷。

[201.21] 一般的に言う、もしあらゆるものごとが神々にとっては可能であると彼らが主張するならば、不可能なものごとでも神々にとっては可能であることになるが、だからといって、将来のものごとについての神々の予知を通して、あらゆるものごとが必然的に生じるということが示されることはないだろう。他方、不可能なものごとは神々にとっても不可能であるという点を彼らが譲歩するならば、まず彼らは、そのような類の予知〔将来のものごとを必然的なものごととして予知すること〕が可能であることを示した上で、次いでその予知を神に帰さなければならない。というのも、神々が将来のものごとについてそのような予知を行うということは、明白でもなければ事実によって同意されていることでもないからである。

[201.28] こうして、神々は事物が自然本性的にあるがままに予言するとわ

⁹⁴ 底本に従い ἐπει δὲ [ei] (Hackforth) と読む。

⁹⁵ 底本に従い ὁ (add. Bruns) を挿入。

⁹⁶ これに対して後のプロクロスは、神々は非決定的・許容的なものごとを決定された・必然的な仕方では予知していると論じた（『神学綱要』124, 『摂理、運命と自由について』62-65 他）。ポエティウス『哲学の慰め』5 pr. 6, 59-61 も参照。

⁹⁷ 底本に従い προλέγουσιν <λέγουσιν> (Bruns) と読む。

れわれは論じるのだが、そのことによってわれわれはト占術や神々の予知を否定しているわけではない。XXXI [201.30] またわれわれは、ト占術の有益性を人々から奪い取っているわけでもない⁹⁸。ト占術の有益性は、ひとが何らかのものごとを避けることができるようになるという点から生じるのだが、神の忠告がなければそのものごとを避けることはなかったであろう。ト占術を称揚し、自分たちの学説によってしかト占術を保持することはできないと言いながら、あらゆるものごとが運命に即して生じるということの証拠としてト占術を用いる人は⁹⁹、何ら真なることを語っていないというだけでなく、神々とは¹⁰⁰ まったく相容れない不条理を大胆にも神々について語っているのである¹⁰¹。神々について彼らの語っていることが、どうして不条理でないことがあろうか。実際、彼らに対しては、次のような疑問が投げかけられている。すなわち、もしあらゆるものごとが必然的に生じるのであれば、一体どうして神々からのト占が忠告に似た形で生じるのか——そのト占を聞いた人が、聞いたことにもとづいて、それを避けることも行うこともできるかのように——という疑問である。とりわけ彼らが持ち出すのは、ライオスに下された次の神託である¹⁰²。すなわち、ピュティオス〔アポロン神〕はラ

⁹⁸ ストア派のクリュシッポスがト占による予言の存在から運命論を証明したとされることについては、「日本語訳・注（Ⅱ）」注 117 を参照。アレクサンドロス自身のト占に対する態度については、「日本語訳・注（Ⅰ）」注 2 を参照。

⁹⁹ 底本に従い ταύτη πίστει のまま読む（ταύτη <τῇ> πίστει add. Bruns）。

¹⁰⁰ 底本に従い πέρι（Bruns）ではなく περὶ（vulg.）と読む。

¹⁰¹ 以下、=SVF II.941。

¹⁰² ストア派のクリュシッポスも、オイディプスの父ライオスに対するアポロンの神託に言及したと伝えられている（エウセビオス『福音の準備』4.3.12=ディオゲニアノス断片 1 Gercke=SVF II.939）。ただし、ここでのアレクサンドロスの議論、および、キケロ『運命について』30=SVF II.956、ガダラのオイノマオス断片=エウセビオス『福音の準備』6.7.23-24=SVF II.978 の由来がクリュシッポスか否かについては、解釈が分かれている（Bobzien 1998, 175-179, 208 n. 75, 216 n. 103, 317 n. 158, Gourinat 2005, Sharples 2007）。他のストア派の資料として、アッリアノス『エピクテトス談義』3.1.16-18 も参照。中期プラトン主義における言及としては、アルキノオス『プラトン哲学講義』26、カルキディウス『プラトン「ティマイオス」註解』153。

イオスに対して、子供を作ってはならぬということを次のように言ったという。

「もしお前が子をなすならば¹⁰³、産まれる子はお前を殺すであろう、
そして、お前の家はすべて血にまみれるであろう。」¹⁰⁴

これに対して彼ら〔運命論者〕は、彼らの著作が伝えているように、神はライオスが従わないだろうということを知らずに神託を告げたのではなく¹⁰⁵（神は何よりもまして知っていただろうから）、もしそのような神託を告げなければ、ライオスとオイディプスの悲劇的逆転（περιπέτεια）にまつわるものごとが何一つ生じなかっただろうからそうしたのだ、と言うのである。[もし神託がなければ] ライオスが自分に産まれた子を実際そうしたように捨てることもなかっただろうし、その子が羊飼いに拾われてコリントスのポリュボスの養子となり、大人になってライオスと路上で遭遇し、互いを知らずして彼を殺すこともなかっただろう。もし両親によって家の中で息子として育てられたならば、両親を知らないでいることはなく、したがって父を殺し母を娶ることもなかっただろうからである。これらのものごとがすべて保持され、運命の劇（δράμα）が完遂されるために、神は神託を通してライオスに対し、言われたことを避けることができるという表象を与えたが、ライオスは酔っぱらって子どもを作ってしまったため、生まれた赤子を死なせるべく捨

¹⁰³ エウリピデスの写本では τεκνώσεις とある語が φυτεύσεις となっている。

¹⁰⁴ エウリピデス『ポイニッサイ（フェニキアの女たち）』19-20。

¹⁰⁵ 写本通りに読むと「知らずに……告げたのであり」となって意味がつかないため、<οὐχ> οὕτως (add. Usener, von Arnim) と読む。底本はもともと <οὐ> φασιν (Bruns) とする修正に採用しており、これに従うと「これに対して彼ら〔運命論者〕は、彼らの著作が伝えているように、神はライオスが従わないだろうということを知らずにライオスに神託を告げたのだと言うわけではない（神は何よりもまして知っていただろうから）。むしろ彼らは、もし神がそのような神託を告げなければ、ライオスとオイディプスの悲劇的逆転にまつわるものごとが何一つ生じなかっただろう、と言うのである」となる（ただし Sharples 2001, 570 n. 430）。

てた¹⁰⁶。しかし、そのように子を捨てたことこそが、神々を冒瀆する物語の原因となった、というわけである。

[202.25] では、以上のように論じる人は、どのようにしてト占術を保持したり、神々に関する敬虔な先取観念を教示したり、ト占術には有益な点があることを明らかにしたりしているのだろうか。ト占術とは将来のものごとを予言することだと考えられるが、彼らはアポロンを神自らが予言するものごととの作り手にしているのである。実際、神がそのような仕方でも神託を下さなかったならば生じることはなかったであろうことは——アポロンは、彼らをめぐる¹⁰⁷ できごとが生じるべく、そのような神託を下したのだが¹⁰⁸——、神託を下した者の仕業としか言いようのないものであって、単なる将来のものごとへの予告ではないだろう。とはいえ、もし神々が未来のものごとにも協力するという点で他の占師よりもまさっていなければならないとしても、善いものごとが¹⁰⁹ 生じるように助力するというのであれば理に適っているだろう（詩人たちもこの点について、神々は「善きものごとへの贈り手」¹¹⁰ だといつも歌い上げているのだから）。しかし、彼ら[運命論者]の議論に従うと¹¹¹、ピュティオス[アポロン神]はライオスにとって何ら善いものごとをもたらしことはない一方で、この上なく冒瀆的で不敬なものごとからライオスの家

¹⁰⁶ Gourinat 2005, 271 は「言われたことを避けることができるかのような表象」というように訳し、実際には避けることができなかったことが含意されていると解釈している。この点に関して、神が偽なる表象を人々にもたらしきこともあったとストア派のクリュシッポスが論じたことについては、プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1057a-b=SVF III. 177。ただし Sharples 2007, 187-188 が言うように、実際には避けることができなかったことはストア派の考えでは合意されておらず、アポロンは純粹にライオスに悪しき運命を避けるための助言を与えたのだとも解しうる。

¹⁰⁷ 「彼ら次第の」とも訳しうる。

¹⁰⁸ 底本の示唆に従って挿入と解する。

¹⁰⁹ πρὸς τὸ γίνεσθαι συνεργούμενον を πρὸς τὸ γίνεσθαι <τὸ ἀγαθὸν αὐτοῖς> συνεργεῖν εὐλογον (Donini) と読む。Zierl は <ἀγαθὸν τι αὐτοῖς> とする付加を提案（意味に大きな違いはない）。

¹¹⁰ ホメロス『オデュッセイア』8.325, 335, ヘシオドス『神統記』46, 111, 633, 664。

¹¹¹ κατὰ γε (Bruns) とはせず κατὰ δὲ (libri lat. Donini) のまま読む。

が決して逃れることがないように、あらゆる手立てを尽くして努めていることになる¹¹²。以上の議論を聞くなら、このような摂理よりも、エピクロス派の人々の論じるところの摂理の欠如の方がよほど敬虔ではないかと誰もが言うだろう。

[203.12] 運命とは神であって、それは宇宙そのものとその内にあるものごとの秩序とを保全するために、宇宙の内に存在したり生じたりするものごとを用いるのだと論じながら、同時に運命についてそのようなことを論じることが、どうして一貫していると言えるだろうか¹¹³。すなわち、運命はこの上なく冒瀆的な行為が生じるように努めて、ピュティオス [アポロン神] さえも共犯者として道連れにするのだというようなことである。いったい運命はいかなるものごとを保全するために、子による父殺しや、母と子の冒瀆的な結婚や、父にとって弟でもある子の誕生を用いたのだと彼らは言うのだろうか。いったい宇宙の内の統御¹¹⁴におけるいかなるものごとについて、こうしたものごとにもとづいて保全されることが理に適っているなどと言うのだろうか——アポロンすらそのことが為されないまま放っておかれることを恐れるほどに。それが生じなければ、人間たちがポリスにおいて法にしたがって住むことにとって妨げとなったのだろうか、それとも、宇宙の諸元素の保全にとって、あるいは、神的なもの [天体] の秩序ある永遠なる周回にとって、あるいは、それから宇宙がロゴスに即して構成され統御されるところの何かのものごとにとって、妨げになったのだろうか。もし彼らがこのような作り話を生業としている悲劇作者から別の物語を聞くならば——ある女が嫉妬のゆえに他人の子に策略を企てたが、自分の子を殺してしまったとか、ある不運な老人テュエステスが自分の子の肉を、アトレウスという名の兄がその

¹¹² 同様のストア派に対する批判として、プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1049d-e = SVF II. 1125, 1049a-b = SVF II. 1177, 『共通観念について』1065e, 1075e。

¹¹³ = SVF II. 928。

¹¹⁴ 底本のまま τῆς ἐν τῷ κόσμῳ διοικήσεως と読んだが、Bruns は「宇宙の内のものどもの統御」(τῆς τῶν ἐν τῷ κόσμῳ διοικήσεως) とする修正を提案している。

ような食事を用意したため食べてしまったとか、そういう物語だが¹¹⁵——、彼らは明らかに、そうした物語を実際に起こったものであるかのように信じて、その物語を通して運命と摂理の存在を確立することだろう。それはあたかも、自分が確立しようとする当のものを、その確立するための議論自体を通して否定することを生業としているかのようである。しかし、帰結の不条理さのゆえに前提を否定する方が、前提のゆえにこれほど不条理なものごとを擁護するよりも、ずっとましであり思慮深いだろう¹¹⁶。しかし彼らは、この上なく不条理なものごととも安易に信じてしまい、そうしたものがロゴスに即して生じる原因（理由）を説明して憚らないのである。

XXXII [204.5] しかし、このようなことはもう十分だろう（彼らの学説の不条理さを個別に示すだけで十分だろうから）。思慮ある人はもはや思慮をもたないことができないとしても¹¹⁷、思慮あることは思慮ある者次第である、とどうして言えるのかは、十分に示されたと思う。思慮ある者となっている今は、そうあることは彼次第ではない（さもなければ今も思慮をもたないことが左右できるということになってしまいうだろうから）。しかし、そうなる前は、そのように思慮ある者になることと同じく¹¹⁸、そうならないこともできる力能をもっていたのである。そして、前述の理由（原因）によって¹¹⁹、自分自身そのような者となることに寄与したのである。

[204.12] 神々の場合、そのように〔神として／思慮ある者として〕あることはもはや神々次第ではない¹²⁰（この点も彼らが問題にしたことの一つで

¹¹⁵ 前者の例は、ゼトスの妻アエドンの物語のことか（A. H. Griffiths *apud* Sharples）。あるいは特定の悲劇を念頭に置いてみるとすれば、前者はエウリピデスの悲劇『イノ』、後者はエウリピデスの悲劇『クレテス』によるか（Magris）。

¹¹⁶ 底本は <ἀν>（add. Bruns）を付加しているが、不要か（Zierl）。

¹¹⁷ 底本に従い *δυναμένων τὸ* (V) を *δυναμένῳ μὴ* (Bruns) と読む。

¹¹⁸ 底本に従い *[δὲ] τοῦ* (ES lat. B) と読む。

¹¹⁹ 底本に従い *δι' ἧν* <δὲ> と読む。27 章の議論への参照。

¹²⁰ 底本に従い *οὐκέτ' ἂν <εἴη ἐπ' αὐτοῖς> τὸ εἶναι* (von Arnim SVF Hackforth) と読む。「そのように」は「思慮ある者として」と解するのが文脈上は自然であるが、Sharples は「思慮 (φρόνησις)」が神に帰属する徳ではないという理由から、これを「神として」と解し

あった)¹²¹。なぜなら、そのように「神として／思慮ある者として」あるという性質は神々の自然本性の内に具わっているのであり¹²²，そうした仕方で属するものごとは何ひとつその神次第ではないからである。神々がもっている善い性質が，称賛すべき善い性質よりもさらにすぐれているものであって，尊重すべきもの，祝福すべきものであるのも，そのためなのである¹²³。というのも，そもそも神々の自然本性が劣ったものを受け入れることはできないからである¹²⁴。他方，われわれは徳の獲得について称賛される。というのも，われわれの自然本性はより悪しきものを受け入れることもできるのに，より善い状態に向かうことを怠らなかったからであり，より悪しき性質は汗をかくことも苦勞することもなく生じるが，徳は苦勞と努力と多くの汗と共に生じると考えられるからである¹²⁵。とはいえ思慮ある者も，個別的な行為においては，その行為をしないこともできる力能をもっている。〈そして神々もまた，〉もし彼らにとっても他の仕方でもありうるものごとに関して何らかの行為が生じるのであれば〈，そのような力能をもっている〉¹²⁶。というのは，ピュティオス〔アポロン神〕も，同じ人に対して神託を下すことも下さないこともできる力能を奪われてはおらず，アスクレピオスも，助けること〔も助けないことも〕できる力能を奪われてはいないからである。いずれにせよ，ほとんどすべての人間が，アスクレピオスは自らを治癒者と崇めることに熱心ではない者に対してよりも熱心である者に対してこそ，手を差し伸べるのだと信じて，その神が最も顕現する場所に赴いて救いを求めるのである。

ている（37章211.8以下の議論および注195を参照）。ただしストア派の議論の紹介であれば，「思慮」を神に帰していても問題はないか。

¹²¹ 以下，＝SVF II.985。

¹²² 底本に従い γάρ ἐστιν ἐν πάρεσιν (von Arnim SVF Donini) と，また <τὸ> τοιοῦτον (add. HO Bruns) と読む。

¹²³ アリストテレス『ニコマコス倫理学』1101b12-35，1178b8-18。

¹²⁴ 底本に従い αὐτῶν <τοῦ χειρόνος> (O) と読む。

¹²⁵ ヘシオドス『仕事と日』287以下を念頭に置いているか。

¹²⁶ 欠落があると考えられ，底本に従い ἐξουσίαν，<ἐχουσι δὲ καὶ οἱ θεοὶ ταύτην τὴν ἐξουσίαν> εἶποτε という Donini の挿入案に沿って訳す。

【運命論に対する応答Ⅳ：人間の行為】

XXXIII [205.1] [運命論者の次の議論を検討してみよう —]¹²⁷「動物の意欲に即した活動を保つことによって、われわれ次第のものごととも保たれている、と考えるのは誤りである¹²⁸。なぜなら、意欲に即して生じるものごとはすべて、意欲する者次第だからである¹²⁹。というのも、われわれ次第のものごとは、ある種の活動ではないか。さらに、活動には、意欲に即したものと、意欲に即していないものがあると考えられるのではないか。さらに加えて、活動ではあっても意欲に即していないものごとは、われわれ次第ではないのではないか。そうだとすれば、意欲に即して生じるものごとはすべて、そのように活動する者次第であることになる。なぜなら、他の仕方では活動されるいかなるものごとの内にも、われわれ次第のものごとは存在しないから

¹²⁷ 以下、=SVF II.1001。ここでの議論は13章と同じくストア派（おそらくピロパトル）に由来すると推測される（Bobzien 1998, 389-394）。以下、Sharples の訳を参考に一連の議論として訳出したが、より原文に即して訳すと以下の通り。

「動物の意欲に即した活動を保つことによって、われわれ次第のものごととも保たれている、と考えるのは誤りである。なぜなら、意欲に即して生じることはすべて、意欲する者次第であるから」と彼らは論じる。このことのために、彼らは次のように問う。「われわれ次第のものごとは、ある種の活動ではないか」と。このことを前提として、さらに次のように問う。「活動には、意欲に即したものと、意欲に即していないものがあると考えられるのではないか」と。このことを前提として、加えて次のように言う。「活動ではあっても意欲に即していないものごとは、われわれ次第ではない」と。このことも同意されると、それにもとづいて次のようにみなす。「意欲に即して生じるものごとはすべて、そのように活動する者次第である。なぜなら、他の仕方では活動されるいかなるものごとの内にも、われわれ次第のものごとは存在しないから」と。それゆえ、彼らは次のように言うのである。「われわれによって生じることも生じないことも可能なものごとがわれわれ次第であるということは、われわれの説に従うならば保たれる。なぜなら、このような仕方では生じるものごとは、意欲に即して生じるものごとの内にあるから」と。

¹²⁸ 底本に従い ἡγεῖσθαι を ἐπεῦσθαι (Hackforth) と読む。

¹²⁹ 底本に従い μὴ を削除。

である。それゆえ、われわれによって生じることも生じないことも可能なものごとがわれわれ次第であるということが、われわれの説に従うならば保たれる¹³⁰。なぜなら¹³¹、このような仕方では生じるものごとは、意欲に即して生じるものごとの内にあるから¹³²と。しかしこうした議論は、自分が論じている当の対象のことを何も知らない者がする議論ではなかろうか。なぜなら、意欲に即して活動するものごとの内にわれわれ次第のものごとが存在することを認めたとしても、その論によって¹³³、意欲に即した活動がすべてわれわれ次第であることにはならないからである。実際、意欲に即して生じるものごとの内、理性的な意欲に即して活動されるものごとだけが、われわれ次第という性質を有するのである。理性的な意欲とは、思案したり選択したりする者の内に生じる意欲¹³⁴、すなわち、人間の意欲——ただし、この条件の下で「思案や選択を通して」生じる限りでの——のことである。他の動物の意欲に即した活動は、そのようなものではない。なぜなら、意欲に即して活動されるものごとをしないこともできる力能を、他の動物はもちあわせていないからである。それゆえ、意欲に即した活動の内にわれわれ次第のものごとはあるが、だからといって、意欲に即して生じる活動のすべてがわれわれ次第という性質を有するわけではないのである。

XXXIV [205.22] また、自ら学説によって否定する事実の真理それ自体を、その真理を否定する学説を確立するために用いることは¹³⁵、自分がしていることを知らない者がするようなことではなかろうか。彼らは、「自然本

¹³⁰ ここで注目に値するのは、われわれ次第のものごとを相対立する行為ができる能力に即して捉える考え方が、運命論者の側に帰されている点である（運命論者がこの考え方を批判している 26 章 [196.21] の段落の議論と比較）。アレクサンドロスの自身の考え方が紛れ込んだものとも考えられるが（Sharples, Zierl）、ストア派（おそらくピロパトル）自身に由来する可能性もある（Bobzien 1998, 392）。

¹³¹ 底本に従い εἶναι δὴ を ἐπειδὴ（von Arnim SVF）と読む。

¹³² 底本に従い εἶναι はそのまま読む。

¹³³ 底本に従い διὰ <τούτου> τοῦ λόγου（Long）と読む。

¹³⁴ 底本に従い <ή>（add. Bruns）を読む。

¹³⁵ 底本に従い αὐτὴν [supr. v. i] πρόσθὸ κεκρῆσθαι（V）を αὐτῇ προσκεκρῆσθαι（Hackforth）

性によって」と「運命に即して」とは同じであるとの理由から、自然本性によって組成される各々のものが実際そうしたものであるのは運命に即してのことなのだとみなした上で¹³⁶、加えて次のように論じる¹³⁷。「それゆえ運命に即して、動物は感覚し意欲するものになるだろうし、また、動物の中にはただ活動するのみのものもいれば理性的な行為をするものもいるだろうし、過ちを犯すものもいれば正しく行うものもいるだろう。そうしたものが、それらにとっては自然本性に即しているからである。だが、過ちと正しい行い〔の区別〕が保持され、そういった自然本性や性質が否定されないのであれば、称賛と非難、懲罰と褒賞もまた保たれる¹³⁸。なぜなら、これらのものごとにはそのような帰結と秩序があるのだから」と。しかしながら、自然本性や自然本性に即したものとを運命や必然に移し変える者たちにとっては、これらのものがこうした仕方では生じるということは、もはや帰結しないのである。なぜなら、行為能力をもつ理性的な動物にとって自然本性に即したものととは、過ちを犯すことと正しく行うことのいずれも必然的な仕方（κατηναγκασμένως）で為すことなく、そのどちらもできることだからであり、実際このことは真であり、事実そのようになっているのである。それに対して、われわれは自分たちが為すあらゆるものごとを必然的に為すのだと論じる者にとっては、理性的に活動する者の中には正しく行う者と過ちを犯す者がいるということは帰結しない。彼らは、これこれの状況の下では

と読む。

¹³⁶ ただし「自然本性」と「運命」の同一視は、6章169.18以下でアレクサンドロス自身も認めていた。

¹³⁷ 以下、=SVF II.1002。これも13章と同じくストア派（おそらくピロパトル）に由来すると推測されるが、14章におけるアレクサンドロスの批判とは裏腹に、動物の中で非理性的なものと理性的なものとの間の区別を認めている点が注目される（Bobzien 1998, 378-387）。背景にあるストア派による「自然の階梯（scala naturae）」の考え方については、シンプリキオス『アリストテレス「カテゴリー論」註解』306.19-27=SVF II.499他（Hahm 1994）。

¹³⁸ 底本に従い μέν ὄντων を μενόντων, ἀγνοουμένων を ἀναιρουμένων, ἐπαινοί μένου<σι> と読む（von Arnim SVF）。

われわれが行為しないことは不可能であり、また、われわれに行為をなさしめる状況も常に必然的にわれわれに生じると論じるのだが、この主張に従えば、われわれは必然的にあらゆることを為すのである。どんな仕方であれ好ましいものごとを為せば¹³⁹、正しい行いを為すと言われるわけではないし、どんな仕方であれ劣悪な行為をすれば、過ちを犯すと言われるわけでもない。そうではなくて、悪しきものごとの方をする能力ももっているが、善いものごとの方を選択して行為する場合に¹⁴⁰、その人のことを正しく行くとわれわれは言うのである¹⁴¹。その同じものごとを偶運的に為した者については、もはやその人のことを正しく行くとわれわれは言わない。なぜなら、正しく行うということについての判断は、行為されたものごとだけでもとづくのではなく、むしろその行為をなさしめるところの性向や能力がずっと重視されるからである¹⁴²。過ちについても同じ議論が当てはまる。

[206.19] しかし、実際にする行為以外の行為をする能力が状況によって奪われていて¹⁴³、その行為をなさしめるところの状況が自分に生じることに對して¹⁴⁴ 当人がいかなる寄与もしていないならば¹⁴⁵、その人が過ちを犯すとか正しく行うとか、どうしてなお語りうるだろうか。なぜなら、特定の性向——それによって特定の状況下で特定の行為へと向かう意欲が生じる——についても、状況が特定のものであることについても、その人自身には何の力能もないからである。実際、非理性的な動物に対して、これらのいずれも述語づけられることがないのは、そのためである。性向と何らかの状況によっ

¹³⁹ 底本に従い χαρίεν <τι> ποιούντα (lat. Donini) と読む。

¹⁴⁰ 底本に従い [ή] τὰ βελτίω (HES lat. yO) と読む。

¹⁴¹ 善き行為と悪しき行為の間の選択可能性が明確に語られている点で注目すべき箇所である (近藤 2008, 10)。

¹⁴² ここでの「性向 (ἐξίς)」は、徳や悪徳といった性向よりも、行為選択の能力のことを指すのではないかという解釈も提案されているが (Sharples), そのように読むのは難しい (Donini 1987 (2011), 152-3, Sharples 2001, 549 n. 255)。

¹⁴³ 底本に従い <καί> οὐδέν (Hackforth) と読む。

¹⁴⁴ 底本に従い <ταῦ>τα (lat. y Diels Hackforth) と読む。

¹⁴⁵ 底本に従い πρᾶττουσιν, πῶς とコンマを打つ (Hackforth)。

て行為へと導かれ、このような仕方であることについて自分が左右することはできないのだから¹⁴⁶、そうした仕方で行為されることについては、過ちを犯すとか正しく行うとは語りえないのである。称賛と非難、懲罰と褒賞は、彼ら自身も言うように過ちと正しい行いに適用されるのだから、これら後者が否定されれば、前者のそれぞれもまた否定されるだろうことは明らかである。

[206.30] 正しく行うということは、神々については厳密な意味で語られるのではなく、善いものごとを為すということと等しい意味として語られる¹⁴⁷。少なくとも、正しく行うことができる人には過ちを犯すこともできるとするならば、そして¹⁴⁸、神的な性質は過ちを受け入れないとするならば、そうである。実際、われわれが神々を「称賛」することがないのも、そのためである。というのも神々は、称賛や、称賛の対象となる正しい行いよりも、すぐれたレベルにある存在だからである。

XXXV [207.4] また¹⁴⁹、問題となっているある事柄を証明できるものと彼らが自信をもっているあの議論も、放ってはおかないでおこう¹⁵⁰。彼らは次のように論じている¹⁵¹。「運命がこのようなものとして¹⁵²存在するのに宿命

¹⁴⁶ 底本に従い μηδενός を μηδὲ ὄν (lat. Donini) と読む。

¹⁴⁷ Mansfeld 1989 は、この箇所にて中期プラトン主義の神学的議論、具体的には「否定の道 (via negationis)」と「類比の道 (via analogiae)」(アルキノオス『プラトン哲学講義』10) の影響を見ている。

¹⁴⁸ 底本に従い ἐν τούτοις (del. V¹, om. a¹²) は読まない。

¹⁴⁹ 以下、=SVF II.1003 (部分)。

¹⁵⁰ 底本に従い παραλίπωμεν (V SVF) と読む。

¹⁵¹ 以下「X (する) のに Y (し) ないということはない」と訳したのは、「〈X〉かつ〈Y でない〉、ということはない」というストア派の論理学で用いられる定型表現である。ストア派のクリュシッポスは、通常は「もし X ならば Y」という条件命題で表現されるものについて、厳密には「〈X〉かつ〈Y でない〉、ということはない」という連言命題の否定の形で表現されるべき場合があると論じたことが伝えられている(キケロ『運命について』15=SVF II.954)。この35章の議論の解釈については、Vegetti 1991 を参照。

¹⁵² 「このようなものとして」とは「ものごとに必然性をもたらしものとして」ないし「あらゆるものごとにわたるものとして」といった意味か(Sharples)。ストア派における「運

（ペプロローメネー）が存在しないということではなく、〈宿命（ペプロローメネー）が存在するのに〉命運（アイサ）が存在しない〈ということではなく〉¹⁵³、命運（アイサ）が存在するのに因縁（ネメシス）が存在しないということではなく、因縁（ネメシス）が存在するのに法が存在しないということではなく、法が存在するのに為すべきことを命じ為すべきでないことを禁じる正しいロゴスが存在しない¹⁵⁴ということはない¹⁵⁵。しかるに、禁じられるのは過った行いであり、命じられるのは正しい行いである。したがって、運命がこのようなものとして存在するのに過ちと正しい行いが存在しないということはない。しかるに、過ちと正しい行いが存在するならば、徳と悪徳が存在し、もしこれらが存在するならば、立派なものごとと醜悪なものごとが存在する。しかるに、立派なものごとは称賛されるべきものであり、醜悪なものごとは非難されるべきものである¹⁵⁶。したがって、運命がこのようなものとして存在するのに¹⁵⁷称賛されるべきものごとと非難されるべきものごとが存在しないということはない。しかるに、称賛されるべきものごととは褒賞に値するものであり、非難されるべきものごととは懲罰に値するものである。したがって、

命」と「宿命（ペプロローメネー）」の同一視については、エウセビオス『福音の準備』6.8.8=ディオゲニアノス断片 2 Gercke=SVF II.914、ブルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1056c=SVF II.997。

¹⁵³ 底本に従い οὐδὲ ἔστι μὲν πεπρωμένη (ita suppl. B² Lond. (sed μὲν om.) O Bruns (app.) SVF) を挿入。

¹⁵⁴ 底本に従い οὐκ [a¹² O von Arnim SVF: οὐδ' VH lat. Bruns] ἔστιν δὲ λόγος ὀρθός と読む。

¹⁵⁵ クリュシッポス『法について』冒頭の引用として、「法は人間に関わる事柄と神に関わる事柄すべての王である。法は立派なものごとと醜悪なものごとを監督し支配し導くものでなければならず、したがって正義と不正の規準でなければならないのであって、自然本性的に社会的である動物に、為すべきものごとを命じ、為さざるべきものごとを禁じるものでなければならない」（マルキアヌス『法学提要』I=SVF III.314）。他に、ブルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1037c=SVF III.520、アレクサンドレイアのピロン『ヨセフについて』28=SVF III.323、アレクサンドレイアのクレメンス『ストロマテイス』1.25.5=SVF III.332 他。

¹⁵⁶ ブルタルコス『ストア派の自己矛盾について』1039c=SVF III.29 他。

¹⁵⁷ Zierl に従い ἐστὶ を ἐστι と読む。

運命がこのようなものとして存在しながら褒賞と懲罰が存在しないということはない¹⁵⁸。しかるに、褒賞とは報酬の授与であり、懲罰とは矯正である。したがって、運命がこのようなものとして存在しながら報酬の授与と矯正とが存在しないということはない¹⁵⁹。もしこれらが否定されないのならば、あらゆるものごとが運命に即して生じて、正しい行いと過ち、褒賞と懲罰、報酬の授与、称賛と非難は保たれるだろう¹⁶⁰。」

XXXVI [207.21] しかし、もし以上のことを彼らは何らかの状況を原因として強制されて論じているのであれば、彼らには赦しを与えるのがふさわしく、われわれの方も彼らが必然的に論じていることについてとやかく問題にするべきではなく、また彼らの方も彼らとは異なることを論じている人たちについてとやかく問題にするべきではないだろう（各々の側が論じていることや考えていることの原因は¹⁶¹、状況の力にあるのだから）¹⁶²。また、論じている者たちがそのように論じていることに何ら寄与していないのであれば、彼らにその責任（原因）を帰すべきでもないだろう。状況も性向も——その性向に応じて、彼らは状況によってそのように動かされることになるのだが

¹⁵⁸ この箇所は、行為がわれわれ次第であろうとなかろうと褒賞や懲罰などが運命づけられていると主張している議論にも見えるが、褒賞や懲罰を正当化するストア派本来の議論とは区別して考えるべきである。この点については「日本語訳・注（Ⅱ）」注112を参照。

¹⁵⁹ 底本に従い οὐκ ἔστι <δὲ> γέρωξ ἀξίωσις (B²S Casp. O.) と読む。

¹⁶⁰ ἀπειρηται を <μη> ἀνήρηται (von Arnim SVF), μὲν εἶναι を μένει καὶ (von Arnim Apelt) と読む。底本は ἀπειρηται を ἄπερ εἴρηται (ES Hackforth), μὲν εἶναι を μένει πάντα (Hackforth) と読み、「もしそうであるならば、あらゆるものごとが運命に即して生じて、前述のものごとはすべて保たれるだろう。すなわち、正しい行いと過ち、褒賞と懲罰、報酬の授与、称賛と非難のことである」と解している。

¹⁶¹ 底本に従い δοξαζόντων τινὰ (V) を δοξαζομένων αἰτία (Schwartz) と読む。

¹⁶² 運命論が議論すること自体を無効にするという議論については、すでにエピクロス『ヴァティカン写本教説』40、『自然について』第25巻 Laursen 1997, 35-37=Long & Sedley 20C2-7にその原型がある。同様の議論として、ガダラのオイノマオス断片=エウセビオス『福音の準備』6.7.14-19, カルキディウス『プラトン「ティマイオス」註解』175。

——彼ら自身の内には原因がないのだから。しかし、もしわれわれには何か悪いこともよいことも語る力能があるのならば、彼らの議論の構成について、いかにも簡潔に、同意された明白な事柄から帰結を導くものだと、驚かない人が誰かいるだろうか¹⁶³。

[208.2] それとも彼らは¹⁶⁴、推論を長々と編み出したその苦勞から、何の益も受けていないのだろうか¹⁶⁵。すなわち彼らは、運命は運命に即して生じたものごとや生じるものごとのすべてを、その運命によって生じるものごとの妨げられない活動のために用いる（すなわち、石を石として、植物を植物として、動物を動物として——動物としてであれば、意欲をもつものとして¹⁶⁶——[用いる]というように、それらの各々が生じた自然本性に即したあり方に応じて）と前提する。そして、運命は動物を動物すなわち意欲をもつものとして用い、運命によって¹⁶⁷動物を通して生じるものごとは動物の意欲に即して生じる（これらもまた、何であれ必然的にそのとき生じる状況を原因として帰結するものごとなのだが）¹⁶⁸と前提するのだが、そうすることで彼らは、あらゆるものごとが運命に即して生じる中にあっても、動物が意欲に即して活動するということを守ることを通して、われわれ次第のものごとが存在するということが守っていると考えているのである¹⁶⁹。[そう考えて]

¹⁶³ 以下、=SVF II.1003（部分）。

¹⁶⁴ 底本に従い τὸ μὴ δεῖν ὧν ἦν τὸ ἄρα を <ἦ> τὸ μὴδὲν ὧν ἦντο ἄρα (von Arnim SVF) と読む。あるいは τὸ μὴ δεῖν ὧν ἦν τὸ τήρησις vel τὸ τηρεῖν (Rodier) と読むならば、直前の文章から続けて「……同意された明白な事柄から、論を長々と編み出したその苦勞の対象(?)となっていたことは不要であったという帰結を導くその仕方とに、[驚かない人が誰かいるだろうか]」のように解しうるか。

¹⁶⁵ 底本に従い μακρᾶς の後に疑問符を打つ。

¹⁶⁶ 底本に従い <ὡς> ὀρηκτικῶ (Bruns) と読む。

¹⁶⁷ 底本に従い ὑφ' αὐτῶν を ὑπ' αὐτῆς [sc. τῆς εἰμαρμένης] (Grotius Gercke SVF) と読む。

¹⁶⁸ 底本に従い括弧に入れる (SVF)。τούτων τῶν を τούτων τοῖς (Gercke SVF) と、περιστῶσιν を περιστῶτων (Gercke SVF) と読み、ἂν の後に ἦ (Apelt von Arnim SVF) を挿入。

¹⁶⁹ 13章の議論への言及。

彼らは、他の議論とともに、とりわけ前述の議論を提示するのである¹⁷⁰。ただし私の思うに、彼らはその議論を真であると信じてそうしているというよりも¹⁷¹、その長さと言葉の多さと不明瞭な構成によって聞き手を誤解させようと考えてそうしているのだが。

[208.15]ではわれわれは、その議論で論じられていることを見ていくとしよう。ただし今は、そこで挙げられた語の多くは取り上げず、宿命（ペプロメネー）、命運（アイサ）、因縁（ネメシス）といった彼らが自分たちの考えた意味で用いている語は無視して、他の点について吟味しよう。ここでは、「運命がこのようなものとして存在するのに法が存在しないということはない」という帰結の必然性を学ぶことがふさわしいだろう。というのも、運命に即して生じるものごとは必然的に生じる状況を原因としてそれから帰結するのであって、また、意欲に即して活動する者は——自分自身に由来する原因を絶対的にそれら〔原因としての状況〕に結びつけることにより——その原因に従わないことができないのならば（高い所から投げられた石が下に移動しないことも¹⁷²、球が斜面に放されたならばそこで転がらないこともできないように）、どうして法がなお必要とされるだろうか。実際、石であれば、下に移動するべきではないと誰か語る者がいたとしても、それによって〔下に移動することを〕妨げられることはありえないだろう。石はそれ自体自然本性的にそうしたものであり、そのことに協力するような外的な原因を有しているからである。それと同じように、状況の必然に反して別の仕方で行うことを要求するような言論や法に、われわれの誰も従うことはできないだろう¹⁷³。もしわれわれが、意欲を必然的に引き起こすような状況を先行原

¹⁷⁰ 底本に従い οὕς (del. Bruns) を削除。

¹⁷¹ 底本に従い ὡς οὐκ を οὕχ ὡς (von Arnim SVF) と読む。

¹⁷² 底本に従い ἀφέντα を ἀφεθέντα (Gercke) と読む。

¹⁷³ 運命論に従うと法がわれわれに影響を与えることが一切ありえないことになるという主張は、ストア派の運命論に対する批判としては不当であろう。この点については、クリュシッポスによる「怠惰な議論」の論駁（『日本語訳・注（Ⅱ）』注19）を参照。ただし続く議論では、法がわれわれの行為の原因となることがあることを認めてもお、運

因として有しているのならば、法によって命じられたことを理解してもわれわれには何の役にも立たないだろうからである。こうして、法の有益性が否定されることになるだろう。実際、法とは為すべきものごとを命じ、為すべきではないものごとを禁じるものである一方で、状況が原因となって必然的にわれわれを他のものごとへと動かし連れて行く場合には、われわれの意欲に即した活動が法の命令に従うことはないからである。このような運命のゆえに法の有益性が否定されるならば、法もまた否定されることになるだろう¹⁷⁴。実際、もしわれわれが法に従う力能を運命によって奪われてしまっているなら、法に何の益があろうか。

[209.11] したがって、「運命がこのようなものとして存在する」ということから、「法が存在する」ということは帰結しない。というのも、運命と法とは、少なくとも両者が以下のようなものである限り、相対立するものだからである。すなわち、法とは、為すべきものごとと為すべきではないものごとを命じるものであるが、その前提には行為する者はその命令に従うことができるという考えがあり¹⁷⁵、それゆえ、それに従わない者は過ちを犯した者として罰し、それに従う者は正しい行いを為した者として賞を与えるのである。他方、運命とは、あらゆるものごとが必然的に同様の原因のゆえに生じると主張するものであるが、同様の原因のゆえに生じるものごとについては過ちと正しい行いの区別を語ることはできないのである。

[209.18] 実際、もし法もまた、運命による必然的かつ先行的な諸原因の内にあると論じるのならば、明らかに、法に即した行為を意欲に即して行う者にとっては、法それ自体もまた原因となる状況の内に必然的に存在するが、法に即していない行為を行う者にとっては、そうした状況が存在しないということになるだろう。しかし、法に即した行為をしない原因が以上のようなものであるならば、その人を非難することはできないだろうということは明

命論によると法に即した賞賛や非難などが正当化できないことになると論じている。

¹⁷⁴ 底本に従い <oi> (add. a¹²) を読む。

¹⁷⁵ 底本に従い *πραττομένων* を *πραττόντων* (ES Cas. Lond. O) と読む。

らかである。もし法に由来する原因が、何らかの必然と運命によって現前することを妨げられたために、意欲にとってはそれに従うよりほかないような必然的な原因となる状況の内には存在しないのであれば、どうしてその人が非難に値するだろうか¹⁷⁶。しかし、もし法がこのようなものであるとしたら、それはもはや法ではないだろう。その法に従う者は¹⁷⁷ — そのことを「従う」と言うべきだとすればの話だが¹⁷⁸ — 必然的に導かれ、従わない者は何らかの必然によって従うことを妨げられていることになるからである。したがって、「もし運命がこのようなものとして存在するならば、法は存在しないだろう」という条件命題の方が¹⁷⁹、かえってずっと真であることになるだろう。法が否定され、それとともに過ちと正しい行いが否定されるのならば、彼ら自身も論理上の帰結として考えたように、徳と悪徳が存在することも、人間たちの間に醜悪なものごとと立派なものごと、称賛されるべきものごとと非難されるべきものごと、褒賞と懲罰に値するものごとが存在することも、否定されることになるだろう。

[210.3] したがって¹⁸⁰、これほどの技術を駆使して提示された議論によって確立されたことは何も残らないのであり、われわれ次第のものごとの存在を否定しようと試みる者¹⁸¹に帰結すると彼らが言うところの事態が、彼ら自身にも結論から遡る仕方で帰結してしまうのである¹⁸² — 彼らは〔その困難

¹⁷⁶ 底本に従い τὸ γοῦν を ψόγου, εἰ と読み, κεκωλυμένη の後に疑問符を打つ (Hackforth)。Thillet は写本通りの読みを保ち, 「どうして (その人が非難に) 値するだろうか。意欲にとってはそれに従うよりほかないような必然的な原因となる状況の内に (ある) ということは, 法に由来する原因ではない。何らかの必然と運命によって現前することを妨げられたのだから」と解している (cf. Sharples 2001, 520 n. 65)。

¹⁷⁷ 底本に従い καὶ <τοῦς> πειθομένους (Hackforth) と読む。

¹⁷⁸ 底本に従い λέγειν の後にコンマを入れる (Hackforth)。

¹⁷⁹ 底本に従い συν[ε]ληγμένον (*consequens* lat. = συνημμένον Thillet) と読む。

¹⁸⁰ 以下, = SVF II. 1004。

¹⁸¹ この立場をとる哲学者が実在したかどうかは不明 (キケロ『運命について』40を参照)。

¹⁸² 底本に従い, τοῦ ὑπὸ τοῦ μετὰ τοσαύτης τέχνης ἡρωτημένου λόγου κατεσκευασμένου ἐν τῶν ὑπὸ τοῦ μετὰ τοσαύτης τέχνης ἡρωτημένου λόγου κατεσκευασμένων (SVF Hackforth) と, ἀκολουθήσει τε ἐπὶ ἀκολουθήσει δὲ (coni. Thillet) と読み, また, <ή> ἀκολουθία (SVF

に] 陥っていないと [他人から] 思われることによって自分たち自身も逃れられると考えて、他の人々を先んじて責めることを通して、あたかも自分たち自身は誰もが同意する仕方ですそのものごとを保持していることになるかのようにふるまっているわけだが¹⁸³。もし褒賞も懲罰も存在しないのならば、称賛も非難も存在せず、もしそれらが存在しないのならば、正しい行いも過ちも存在せず、もしそれらが存在しないのならば、徳も悪徳も存在せず、もしそれらが存在しないのならば、神々もまた存在しない、と彼らは言う¹⁸⁴。しかしながら、第一の前提、すなわち、褒賞も懲罰も存在しないということが、すでに示されたように、あらゆるものごとが運命に即して生じるということから帰結する。よって、最後の結論もまた成立することになるが¹⁸⁵、これは不条理であり不可能である。よって¹⁸⁶、その帰結を導いていた「あらゆるものごとが運命に即して生じる」という前提は否定されるべきなのである。

XXXVII [210.14] だが、以上に続いて提示された議論も¹⁸⁷、同様の必然性をもたないかどうか見てみよう¹⁸⁸。それは次のような議論である。「あらゆるものごとが運命に即してありながら、宇宙の統御が妨げられず邪魔されないものではないということはない。そうであるにもかかわらず宇宙が存在しないということもなく、宇宙が存在するにもかかわらず神々が存在しないと

Apelt), <τι> εἶναι (SVF Hackforth) とそれぞれ挿入して読む。

¹⁸³ 底本に従い διὰ τοῦ προλαβόντας ἄλλοις ἐπιφέρειν αὐτὰ τὸ μὴ δοκεῖν ἔχεσθαι τὸ καὶ τοῖς διαφεύγειν ἡγούμενοις を διὰ τοῦ προλαβόντες ἄλλοις ἐπιφέρειν αἰτίαν τῷ μὴ δοκεῖν ἔχεσθαι καὶ αὐτοὶ διαφεύγειν ἡγούμενοι (Hackforth) と読む。von Arnim による大胆な修正 (<τὸ> διὰ τοῦ πρώ<του> λαβόντας ἄλλο ἐπιφέρειν αὐτὰ τοῦτ' ὁκοῦντα ἔπεσθαι ἄτοπα καὶ <τοῦ> τοῖς διαβάλλειν <τὸ> ἡγούμενον) に従うならば、「すなわち、最初の前提を通して他の帰結を導いた上で、そこから帰結すると思われる不条理を持ち出し、それによって前提を攻撃するということ」となる。

¹⁸⁴ 底本に従い φασιν の後にコンマを打たない。

¹⁸⁵ 底本に従い καὶ (B²) を挿入。

¹⁸⁶ 底本に従い ἄρα (B²) を挿入。

¹⁸⁷ 底本に従い τὸν (add. Bruns) を挿入。

¹⁸⁸ 以下、= SVF II.1005 (部分)。

ということもない。もし神々が存在するならば、神々は善いものであり、もしそうであるならば、徳は存在し、もし徳が存在するならば、思慮は存在し、もしそうであるならば、為すべきものごとと為すべきではないものごとの知識が存在する¹⁸⁹。だが、為すべきものごととは正しい行いであり、為すべきではないものごととは過ちである。よって、あらゆるものごとが運命に即して生じながら、過ちと正しい行いが存在しないということはない。しかし、正しい行いは立派なものごとであり、過ちは醜惡なものごとである。そして、立派なものごとは称賛すべきものごとであり、悪しきものごとは非難すべきものごとである。よって、あらゆるものごとが運命に即してありながら、称賛すべきものごとと非難すべきものごとが存在しないということはない。もしそうであるならば、称賛と非難もまた存在する。だが、われわれは称賛する対象に褒賞を与え、非難する対象に罰を与える。そして、褒賞を与える対象に報酬を授与し、罰を与える対象を矯正する。よって、あらゆるものごとが運命に即して生じながら、報酬を授与したり矯正したりするということが存在しないということはない。」

[210.28] この議論もまた同じ学派から生まれたものであるが、同じような仕方で誤りとして反駁されることは明らかだろう。まず、「あらゆるものごとが運命に即してありながら、宇宙の統御が妨げられず邪魔されないものではないということはない」ということに、誰が簡単に同意するだろうか¹⁹⁰。なぜなら¹⁹¹、生じるものごとのなかには、必然的に生じるものごとと許容的に生じるものごととがあつて、さらに後者には、自然本性に即して生じるものごと、選択や理性に即して生じるものごと、意欲に即して生じるものごと、偶運的ないし偶発的に生じるものごととがあるからである。だが、運命によって「必然的に生じるものごと以外の」他のすべてのものごとが否定されてしまうのである。したがって、宇宙の統御が妨げられず邪魔されないもの

¹⁸⁹ 底本に従い ῆ は削除（Gercke SVF）。

¹⁹⁰ 底本に従い ἄν は削除し（om. lat. O），τις ではなく τίς（V Grotius O Nourrisson Boussoulas）と読んで疑問文と解し、また συγχωρήσει（Va¹²O）と読む。

¹⁹¹ 底本に従い [ἐν] τῷ（del. Bruns）と削除。

としてとどまることはないだろう¹⁹²。しかし、たとえこのことが譲歩され、宇宙が存在するということ、宇宙が存在するならば神々が存在するということ（エピクロスによると神々は宇宙の外にいるにせよ¹⁹³）、神々は善きものであるということが認められ、さらには徳が存在するということも神々の存在から帰結するとしても、神々の徳が存在するということから思慮が存在するということがどうして帰結しようか。この帰結の必然性とはいかなるものかというのか。たしかに、人間の徳が存在するということが前提なののだとしたら、思慮もまた存在するということがそこから帰結することだろう。しかし、前提から得られることは神々の徳が存在するということだったのだから、どうして神々の徳からさらに思慮が帰結するだろうか。思慮とは人間の徳だからである。実際、人間の徳と神々の徳とが同じであると言うことはできない¹⁹⁴。これほどまでに自然本性の点で互いに離れているものの完全性と徳が同じであると語ることが、他の点でも真ではないことはもとより、この問題について彼らが語った議論もまた、何ら理に適ったものを含んではいない。思慮とは、彼らが言うように、為すべきものごとと為すべきでないものごとの知識のことであるが、これは人間の徳なのである¹⁹⁵。というのも、為すべ

¹⁹² 底本の注釈に従い、οὐκ ἄρ' ἄ<v> と読む。Diels や Bruns は οὐκ ἄρα <οὐκ ἄν> と読み、「[運命論によると] 宇宙の統御が妨げられず邪魔されないものとしてとどまらないということはないだろう」と解している。

¹⁹³ 神々は「世界間空間（μετακόσμιον, intermundia）」に住むというエピクロス派の説を指すと考えられる（キケロ『神々の本性について』1.18, ルクレティウス『事物の本性について』5.146-7）。ただしエピクロス自身が神々をいかなる存在として考えていたかについては解釈が難しく、エピクロスの微妙な議論を伝えるいくつかの資料は、神々が固体的な物体としてではなく、特別な「影像」の流れとして（人間が自らの倫理的理想を投影した構築物として（?））存在すると論じられたことを示唆している（キケロ『神々の本性について』1.43-49, セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』9.43-47 他）。Long & Sedley ch. 24 を参照。

¹⁹⁴ 以下、=SVF III. 247。

¹⁹⁵ =SVF III. 283。ストア派による「思慮」の規定としては、ストアピオス『抜粋集』=SVF II. 262 他。アリストテレスが「思慮」を「他の仕方でありうる」「人間的な事柄」に関わると考えている点については、特に『ニコマコス倫理学』1140b1-6, 1141b8ff。

きではない行為をすることもできる場合に、為すべきものと為すべきでないものごとの知識が存在する余地があるからである¹⁹⁶。しかし、あらゆるものごとが運命に即して生じるのならば、為すべきものと為すべきでないものごとの認識は無益となるだろう。実際、いかなる行為についてもそれを行うことを防ぐことができないのであれば、その人にとってそのような認識など何の益になるだろうか。しかし、もしそうしたものごとの知識が何ら有益ではないのならば、思慮の存在は否定されるだろうし、その結果「もし運命が存在するならば思慮は存在しない」という帰結の方がかえって真であることになるだろう。というのも、運命を前提することで法の存在が否定された先の議論によって、思慮の存在もまた否定されるだろうからである¹⁹⁷。そして、思慮が否定されるならば、明らかに、思慮の存在からの帰結として措定された他のものごとについても、そのいずれもが否定されることになるだろう。

XXXVIII [211.28] あらゆるものごとが運命に即して生じるとしても動物には意欲に即した運動が残されるということを示したところで¹⁹⁸、われわれ次第のものごとを保つことにはならないということについては——もし「われわれ次第のものごと」という語について、一般に認められた先取観念（われわれはそれを、行為において相対立するものごとの双方をなす力をわれわれが有しているがゆえに存在するものであると言うのだが¹⁹⁹）とは異なる別の意味を導入して、何らかのものによってその固有の自然本性に即して生じるものごとを単に「そのもの次第」と言うことを望むのでもないかぎり——、すでに始めの方の議論で何度も述べ、示してきたとおりである²⁰⁰。この学説を確立するために彼らが提示した他の議論も、以上の議論と同じような

¹⁹⁶ 底本に従い ἐν οἷς γὰρ οἷον τε πραχθῆναι τι καὶ τῶν <οὐ> ποιητέων (lat. Valgiglio) と読む。

¹⁹⁷ 底本に従い ἢ (add. K) を挿入。

¹⁹⁸ 底本に従い οἱ (del. B²) を削除。

¹⁹⁹ 底本に従い εἶναι διὰ τὸ ἔχειν のままと読んだが⁸、διὰ (suspectum, Bruns) は不要か。διὰ を削除すると「……われわれが有しているもののことであると言うのだが⁸」となる。

²⁰⁰ = SVF II. 1006。

ものであり、大部分は言葉の上では巧妙であるが、論じられている当の事実との適合性の点からは信用を得ることのできないものである²⁰¹。

【結び】

XXXIX [212.5] 以上が、この上なく神々しい皇帝両陛下、私の考えるところでは、運命とわれわれ次第のものごとについてのアリストテレスの学説の要点となります²⁰²。われわれがこの説をとるならば、神々に対しては敬虔な者となるでしょう。神々には恩恵を授けることも授けないこともできる能力があると考えて、これまで神々から受けてきた恩恵のために神々に感謝し、また神々から恩恵を求めることになるでしょうから。またわれわれは、両陛下と、両陛下と同じような支配者たちに対しても²⁰³、感謝を示す者となるでしょう。両陛下は、両陛下ご自身の選択が行為へと導くのにしたがって²⁰⁴、われわれに対して行為なさるのですから——両陛下がそのように行為なさるのは、両陛下が善いものごとの方をお選びになり、その善いものごとの判断をめぐって考慮なさることによってなのであって²⁰⁵、両陛下をどの方向であれ必然的に導いてしまうような何らかの先行原因に従ってのことではないのです。またわれわれは、自分たちは善い者にも悪い者にもなることができるのだと考えて、徳に配慮する者となるでしょう。行為しないこともできる力を自分も持っているものごとだけが、自分に左右できるものなのですから。

²⁰¹ = SVF II. 1005 (部分)。

²⁰² 以下、皇帝(セウエルス帝とアントニヌス(カラカラ)帝)への献辞を含むため、1章と同じく敬体で訳出した。

²⁰³ 底本に従い <καὶ περὶ ὑμᾶς> καὶ περὶ τοὺς ὑμῖν [ἡμῖν codd.] ὁμοίους ἄρχοντας (Hackforth) と読む。

²⁰⁴ 底本に従い <οἱ> ταῦτα πράττετε [πράττεται codd.] εἰς ἡμᾶς καθάπερ ἡ ὑμῶν [τε καὶ ἡ περὶ ὑμῶν codd.] (Hackforth) と読む。ただし πράττειν ὑμᾶς を ὑμᾶς ἄγειと改変する底本には従わず、πράττειν ὑμᾶς <ἄγει> (Zierl) と読む。

²⁰⁵ 底本に従い τοῦ περὶ を τῷ περὶ (O Hackforth) と読む。

そして²⁰⁶、われわれが人生において行う他の行為についても²⁰⁷、この問題についてのアリストテレスの学説にしたがってその原因を帰す場合にのみ、われわれは理に適った仕方としてすることになるだろうと考えられること、このこともこれまでの議論のすべてを通して両陛下に示そうと試みた通りであります。

（完）

【文献】

底本

[Sharples] Sharples, R. W., *Alexander of Aphrodisias: On Fate* (London, Duckworth, 1983).

他の校訂版・翻訳・注釈

[Bruns] Bruns, I., *Supplementum Aristotelicum* II.2 (Berlin, Reimer, 1892).

[lat.] Thillet, P., *Alexandre d'Aphrodise: De fato ad imperatores*: Version de Guillaume de Moerbeke (Paris, Vrin, 1963).

[Magris] Magris, A., *Alessandro di Afrodizia: Sul destino* (Firenze, Ponte alle Grazie, 1995).

[Natali] Natali, C. & Tetamo, E., *Alessandro d'Afrodizia: Il destino*, Seconda edizione riveduta (Sankt Augustin, Academia Verlag, 2009).

[Thillet] Thillet, P., *Alexandre d'Aphrodise: Traité du destin* (Paris, Les Belles Lettres, 1984).

[Zierl] Zierl, A., *Alexander von Aphrodisias: Über das Schicksal* (Berlin, Akademie Verlag, 1995).

略号

[SVF] Arnim, H. von, *Stoicorum Veterum Fragmenta*, 3 vols. (Leipzig, Teubner, 1903-1905).

[Long & Sedley] Long, A. A. & Sedley, D. N., *The Hellenistic Philosophers*, 2 vols. (Cambridge, Cambridge University Press, 1987).

²⁰⁶ Bruns はここに欠落があると推測しているが、その必要はないと思われる。

²⁰⁷ 「他の行為」が何を指すのかは明白でないが、われわれ次第の行為の存在を前提にした勧奨、懲罰などを指すか（Sharples）。

研究文献（注で参照したもののみ）

- [Bobzien 1998] Bobzien, S., *Determinism and Freedom in Stoic Philosophy* (Oxford, Oxford University Press, 1998).
- [Bobzien 1999] Bobzien, S., 'Chrysippus' theory of causes', in K. Ierodiakonou (ed.), *Topics in Stoic Philosophy* (Oxford, Oxford University Press, 1999), 196–242.
- [Donini 1987 (2011)] Donini, P. L., 'Il 'De fato' di Alessandro: questioni di coerenza', *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt* II 36.2 (1987), 1244–1259; English translation 'Alexander's *On Fate*: questions on coherence', in P. L. Donini, *Aristotle and Determinism* (Leuven, Éditions Peeters, 2010), 159–176; rpt. 'Alexander's *De fato*. Problems of coherence' in P. L. Donini, *Commentary and Tradition: Aristotelianism, Platonism, and Post-Hellenistic Philosophy*, M. Bonazzi (ed.) (Berlin/New York, De Gruyter, 2011), 139–154. (ページ数は2011年出版の論文集による)
- [Donini 1996 (2001)] Donini, P. L., 'Doti naturali, abitudini e carattere nel *De fato* di Alessandro', in K. A. Algra, P. W. van der Horst & D. T. Runia (eds.), *Polyhistor: Studies in the History and Historiography of Ancient Philosophy Presented to Jaap Mansfeld* (Leiden, Brill, 1996), 284–299; rpt. in P. L. Donini, *Commentary and Tradition: Aristotelianism, Platonism, and Post-Hellenistic Philosophy*, M. Bonazzi (ed.) (Berlin/New York, De Gruyter, 2011), 155–167. (English translation 'Natural endowments, habits and character in Alexander's *On Fate*', in P. L. Donini, *Aristotle and Determinism* (Leuven, Éditions Peeters, 2010), 177–190) (ページ数は2011年出版の論文集による)
- [Frede 1980] Frede, M., 'The original notion of cause', in J. Barnes, M. Burnyeat & M. Schofield (eds.), *Doubt and Dogmatism: Studies in Hellenistic Epistemology* (Oxford, Oxford University Press, 1980), 217–249; rpt. in M. Frede, *Essays in Ancient Philosophy* (Oxford, Oxford University Press, 1987), 125–150.
- [Gourinat 2005] Gourinat, J.-B., 'Prédiction du futur et action humaine dans le traité de Chrysippe *Sur le destin*', in G. Romeyer Dherbey & J.-B. Gourinat (eds.), *Les Stoïciens* (Paris, Vrin, 2005), 245–273.
- [Hackforth 1946] Hackforth, R., 'Notes on some passages of Alexander Aphrodisiensis *De fato*', *Classical Quarterly* 40 (1946), 37–44.
- [Hahm 1994] Hahm, D. E., 'Self-motion in Stoic philosophy', in M. L. Gill & J. G. Lennox (eds.), *Self-Motion: From Aristotle to Newton* (Princeton, Princeton University Press, 1994), 175–225.
- [Hankinson 1996] Hankinson, R. J., 'Cicero's rope', in K. A. Algra, P. W. van der Horst & D. T. Runia (eds.), *Polyhistor: Studies in the History and Historiography of Ancient Philosophy Presented to Jaap Mansfeld* (Leiden, Brill, 1996), 185–205.
- [Long 1970] Long, A. A., 'Freedom and determinism in the Stoic theory of human action',

- in A. A. Long (ed.), *Problems in Stoicism* (London, Athlone Press, 1970), 173-199.
- [Lucarini, 2007] Lucarini, C. M., 'Per il testo di Alessandro di Afrodisiade e di Proclo', *Orpheus* (N.S.), 28 (2007), 128-137.
- [Mansfeld 1989] Mansfeld, J., 'An echo of Middle Platonist theology in Alexander *De Fato* Ch. 34', *Vigiliae Christianae* 43 (1989), 86-91.
- [Meyer 2009] Meyer, S. S., 'Chain of causes: What is Stoic fate?', in R. Salles (ed.), *God and Cosmos in Stoicism* (Oxford, Oxford University Press, 2009), 71-92.
- [Sharples 2001] Sharples, R. W., 'Determinism, Responsibility and Chance', in P. Moraux, J. Wiesner (eds.), *Alexander von Aphrodisias* (Berlin/New York, De Gruyter, 2001), 513-592.
- [Sharples 2007] Sharples, R. W., 'The Stoic background to Middle Platonist discussions of fate', in M. Bonazzi & C. Helmig (eds.), *Platonic Stoicism — Stoic Platonism: The Dialogue between Platonism and Stoicism in Antiquity* (Leuven, Leuven University Press, 2007), 169-188.
- [Sorabji 1980] Sorabji, R., *Necessity, Cause and Blame* (London, Duckworth, 1980).
- [Vegetti 1991] Vegetti, M., 'Fato, valutazione e imputabilit . Un argomento Stoico in Alessandro, *De fato* 35', *Elenchos* 12 (1991), 257-270.
- [Zago 2012a] Zago, G., 'Contributi critici al testo del *De fato* di Alessandro di Afrodisia', *Rheinisches Museum f r Philologie* 155 (2012), 364-388.
- [Zago 2012b] Zago, G., 'Congetture al *De Fato* di Alessandro di Afrodisia', *Prometheus* (2012), 248-254.
- [金山・金山 1998] 金山弥平・金山万里子訳『セクストス・エンペイリコス ピュロン主義 哲学の概要』京都大学学術出版会, 1998
- [神崎 2014] 神崎繁訳「ニコマコス倫理学」内山勝利・神崎繁・中畑正志編『アリストテレス全集 15』岩波書店, 2014
- [近藤 2007] 近藤智彦「キケロ『運命について』における論理的決定論と因果的決定論の分離 — カルネアデスの議論か? —」『フィロロギカ — 古典文献学のために』2 (2007), 55-71
- [近藤 2008] 近藤智彦「アフロディシアスのアレクサンドロスによる運命論批判はアリストテレス的か?」『東北哲学会年報』24 (2008), 1-14

※本翻訳は科学研究費補助金（25770001）の助成による成果の一部である。

※本訳注の作成にあたって杉山和希氏（北海道大学大学院文学研究科修士課程）の協力を得た。